

Girls und Panzer
Re. 大洗の奇跡

ROGOSS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦車道を再び志、大洗女子学園戦車道を率いることを決意したみほには悩みがあった。

圧倒的な戦力不足だ。

即戦力を求めたみほの元に自動車部から、ある情報をもたらされ……

新しい奇跡が今、始まる！

(一部、独自設定あり)

目次

黒い捕食者です！	1
即戦力、探します！	7
交渉、始めます！	13
お断り、です！	18
決闘を望みます！	24
皆のためです！	29
流派同士の争いです！	35
流派の激突です！	39
ゆっくりと、前進です！	45
油断大敵です！	51
初めての罰ゲームです！	55
服部流です！	61

車長集合です！	65
協力するのです！	71
西隊長のお考えです！	75
臨む者たちです！	80
波乱の一回戦です！	85
チヨロチヨロ作戦です！	92
厳戒態勢です！	97
呐喊魂です！	102
笑顔…？なのです！	108
各校も注目です！	113
新戦力です！	117
視察なのです！	121
二回戦の始まりです！	126

イナゴ軍団襲来

誤算

一騎当千です！

迎撃なのです！

危機的状况です！

|

|

|

|

|

148 144 139 135 131

黒い捕食者です！

「さすがは強襲戦車競技タンカスロン。もう、残ってる車輛も少ないですね」

「へっ！ 今回のルールはサバイバル、さっさと潰し合ってもらったほうがうち等としても楽勝なんだけどね、なんて言ったのはどこのどいつでい」

「痛いところを突きますね、三上さん」

「てやんでい！」

その時、エンジン音が近づいて来ているのを彼女は聞き逃さなかった。

巨大な岩にスッポリと車体を隠しているため、近づいて来る車輛からは彼女達の乗る「MK. VII 軽戦車テトラーク」の姿は見えていないはずだった。

「由多さん、砲撃用意」

「ふっ、ついに私の出番ね。異次元からの狙撃……インビジブルショットに怯えるがいー！ 任せるのだ、絵音」

「は、ははは」

車長兼装填手という変わった役職を持つ服部絵音はっとりえねは、苦笑いを浮かべると戦闘用意と告げた。

彼女達は戦車道とは違う、より実戦的な競技である強襲戦車競技タンカスロンに参加していた。彼女達は、3年ほど前に彗星の如く現れたダークホースであり、相当の実績を持っていた。実際、黒のテトラークを撃破した者には賞金が出る、とまで言われているほどだった。

強襲戦車競技タンカスロンとは、戦車乗り達が独自に繰り広げる野良試合であり、参加規程レギュレーションは10t以下の車輛であれば何人からのエントリーも可能であり、ほかに目立ったルールは無しという、礼を重んじる本家戦車道からは考えられないような競技であった。観客は自己責任で観戦し、騙し討ち、闇討ち何でもありの強襲戦車競技タンカスロンは、まだマイナーな競技であるものの、近年徐々にその人気を伸ばしてきていた。

現在、彼女達が参加している強襲戦車競技タンカスロンは珍しく主催者がいる口のものだった。ルールはサバイバル。最後の一輛が決まった時点で試合が終了というものだった。

既に試合開始から数時間が経過しており、残りの車輛は3輛のみと先程正式に報告があつたばかりだった。

絵音は猛スピードで坂を駆け下りてくるCV33を見た。未だに彼女達は気付かれない。

「あれはアンツイオですね。と、言うことは……安斎さんでしたっけ?」

「何でも良いんでい。それよりどうするんでい」

「決まってるじゃないですか……勝つのは私達です」

車内の全員が不敵な笑みを浮かべる。

知らぬ者が見たならば、間違ひなく彼女達を悪魔と指差し恐れただろう。

そう、強襲戦車競技タンカスロンに参加している彼女達は悪魔同然だった。ありとあらゆる手段を使い勝利をもぎ取る怪物。その勝利に貪欲な姿と黒い車体から、人は彼女達を「黒い捕食者ブラック・イーター」と呼んでいた。

捕食者は今、何も知らない豆タンクに牙を剥こうとしていた。

「少しコツけば十分です」

「了解」

「私の出番ではないと言ふことか、まあ良い。能ある爪は隠すだ」

絵音が耳を澄ませる。

タイミングは一瞬、僅かなズレも許されない。

「今」

「行くでいー!」

CV33は最後まで彼女達に気付くことなく巨大な岩の前を通過しようとしていた。

しかし、突如現れたテトラークに進行方向を塞がれ、テトラークの側面にトップスピードを維持したまま激突したCV33は元来た道へと吹っ飛ばされた。何回かきりもみ回転をしながら止まると、車体の前方部分がひしゃげたCV33は白旗を上げた。

「さて、残るは……いましたね」

「腕がなるっていうものさ。今日こそ、貴様らの首をとってやろう」

由多が目の前にいる青いBT-7に照準を合わせる。

数週間前から現れた青いカラーリングのBT-7は、圧倒的な操縦技術と砲撃術、そして戦術を見せつけ観客を魅了していた。

本来10t以上であるBT-7は強襲戦車競技は参加できないはずであった。だが、あのBT-7は魔改造でもされているのだろう、何とか10t以下になっているらしい。

絵音達もあのBT-7からは白旗を奪ったことは一度もなかった。故に、何としてもあの白旗をもぎ取ろうと躍起になっているのだった。

「前進ー!」

「任せとけいっ!」

テトラークとBT-7が距離を詰める。

「行進間射撃いけますね?」

「当たり前だ。私は狙撃手だ!」

相変わらずの厨二病……まあ、良いんですけどね。

絵音は再度苦笑いを浮かべるも、全てを由多に任せた。

高校二年生だと言うのに、厨二病が抜けない彼女であるが狙撃術は確かなものがあった。さすがは、自称他惑星からの狙撃手だけはある。

操縦している三上もまた、卓越した技術を持っていた。問題点を挙げるとするならば、スピード狂であるところくらいだ。

テトラークの砲塔が火を噴く。予測射撃された52口径の砲弾は確実にBT-7の側面を貫くと思われた。しかし……

「なっ！」

突然急停止したBT-7は、そのまま弾丸をやり過ぎすとお返しとばかりに撃ち始めた。

「くっそ！　かわしてやるでい！」

「だめ！　止まって！」

三上が大きくハンドルを左に切る。

ガクンという衝撃と共に、テトラークはひっくり返り白旗を上げた。

ハンドル操作と履帯ごと動くシステムによりテトラークは従来の戦車よりも機動力を重視した車輛となっていた。

だが、それは同時に履帯の強度不安という大きな問題も作っていた。致命的なのは、

大きな障害物に当たると乗り上げることができず横転してしまうということだった。

あの時、テトラークの速度は50kmを超えておりスピード狂の三上には絵音の指示は耳に入らなかった。

「くそお! またやられたでい!」

「無念、しかし次会った時こそ……私の悪魔の弾丸で!」

「はあ……スピード狂いに厨二病。最悪ですよ、先輩達」

絵音の一言で車内が凍り付いたことに本人は気付かないままだった。



「どう西住ちゃん? 戦力になりそう?」

「はい。皆さんとてもお上手です! ぜひ私達と一緒に!」

「オツケー! じゃあ、マネージャーと話して来るよ」

「マネージャーですか?」

「そう。本当は話したくないんだけどね。私、あの人は苦手なんだよ」

会長に苦手な人っているんですね……。

遠ざかっていく大洗女子学園生徒会長の姿を見ながら、西住みほはあの軽戦車にはどのような人が乗っているのだろうか? と考え始めた。

即戦力、探します！

「で、どうよ。西住ちゃん」

「そ、そうですね……たくさん練習すれば何とか……なるかな？ とは……」

みほは昨日の紅白戦を思い出し、苦笑いを浮かべた。

初めて戦車に乗った人が多くいた……と、言うよりもみほ以外初めて戦車に乗ったので結果はあまり芳しいものではなかった。

近距離でありながら砲撃を外すチーム、最後の最後で連携を維持できなかつたチーム、泥に足を取られ走行不能になったチーム。

「やつぱさうだよー。でも、何とかしてくれなきゃ困るんだよね。もちろん、私も協力するけどさ」

「私も、せっかくやるんですから皆に上手くなつてほしいですけど……」

人に教えるのは、あまり得意なほうではなかった。

しかも、西住流のように固い戦車をやって欲しいとも思えない。

これからは、自分が楽しめる戦車道を教えなくてはいけないと考えただけで、正直押し潰されそうだった。

その気持ちを知ってか知らずか、角谷は干しいモ食べるー? などと聞いてきていた。

「そうそう。西住ちゃんには先に言っておこうと思ってたんだ」

「何をですか?」

「練習試合だよ」

「ええっ?!」

まだ初めて数える程しか日が経っていないというのに、もう練習試合を組んだというのか!?

みほは角谷の無謀さと大胆さに舌を巻いた。しかし、同時にみほは厳しいが苦言を呈さなくてはいけないと決心せざるを得なかった。

たとえ、どれだけ安全に競技ができるよう改造されているとはいえ、それは実力をそこそこ付けた戦車乗りが扱う場合を想定されているものだ。

まだ素人の域を脱していない、今の大洗女子学園戦車道が試合に臨んでは、怪我人が出る可能性があるともみほは恐れた。

「まだ早すぎる気がします……まずは、しっかりと慣れないと怪我人が出る可能性もありますし……」

「そうは言ってもねー、もう日程も組んじゃったし。何とかなるでしょ」

会長は何を焦っているんだろう？

心の中で浮かんだ疑問をそつと胸に仕舞い込み、干しイモを食べ続ける角谷にみほは尚も交渉を続けた。

「……今の私達じゃ試合になりません。相手にも失礼になります。もう一輛くらい……即戦力になるチームがあつたら別ですけど……」

「即戦力ね」

「心当たりあるんですか？」

みほが聞くと、今まで窓の外を見ていた角谷が椅子をクルリと回しみほの方へ向いた。

そして、満面に笑みでこう断言するのであった。

「ないっ！」



その訪問者は昼休みに訪れた。

いつものようにIV号の仲間で昼食をとっている時だった。彼女はオレンジ色の作業着を着たまま食堂に入ってきたせいとか、周りからは奇異の目で見られていた。当の本人はまったく気にしていないようで、みほの前に来ると笑顔のまま話しかけてきた。

「西住ちゃんだよね？」

「そうですけど……」

「ちよつと話があるんだ。来てくれない？」

彼女はみほだけを半ば強引に連れ出すと、自動車部の部室へと案内した。

中は工具が散乱しており、自動車のカタログや整備マニュアルといった様々な本が所狭しと並べられていた。

「ごめんね？ 突然連れてきちゃって」

「い、いえ……」

「私はツチャ。よろしくね」

「よろしくお願ひします……あの、それで要件は……？」

「いやあ、昨日はやりがいあったなあ」

「やりがいですか？」

突然何を言い出すのだろうか？

訝しむみほに気付いたのか、ツチャは恥ずかしそうに頬をかいた。

「ごめんごめん、戦車の修理の話ね」

「あ……」

破損した戦車は誰が修理しているのだろうか？ というみほの疑問が解決した瞬間だった。予算をどれだけ減らせるか、生徒会も苦心したあげく自動車部に修理を頼むこ

とにしたのだろう。

突然知らされた事実にも、申し訳ない気持ちになりみほは思わず謝罪の言葉を表した。だが、ツチャは良いって良いって、と笑い続けた。

「いい経験だったよー！ これからもやりたいね！」

「それはよかつたです……」

嫌々やっているわけではないとわかり、みほはホッとため息をついた。

「今日来てもらったのはね、知らせなくちゃいけないことがあるんだ」

「知らせなくてはいけないことですか？」

「そうそう。実はね、この学校に戦車チームがあるんだよ」

「本当ですか!？」

寝耳に水の話だった。

会長は本当に見つけてきてくれたのか？

話を進めようとするみほに、ツチャは迷ったような表情のまま口を開いた。

「いやね、ナカジマ先輩の幼馴染がいる関係でよく修理を任されるんだけどさ……戦車道をやってるわけじゃないんだよね」

「戦車道じゃない?」

「うん、強襲戦車競技ダシカスロンって知ってる?」

「タン……カスロン？」

キョトンとしているみほに、やっぱり知らないかーとツチャは言うときい説明を加えた。

「すごいですね。戦車の野良試合なんて」

「ね、私も初めて聞いた時は驚いたよ。しかも、そのチームかなりの腕前で、あの界限だと有名人らしいよ」

かなりの腕前、その言葉にみほは魅かれていた。

正直な話、野良試合などする人がどのような人柄なのか想像できなかつた。

それでも、今の大洗女子学園戦車道に必要な人材だと直感が告げていた。

「まあ、私もナカジマ先輩に言われて伝えただけだからさ。明日、試合があるみたいだし会長と見に行けば？ 多分、会長もそのつもりだよ」

「そうですね。わかりました、ありがとうございます！」

みほがお礼を言うときじゃあねー、と言いなながらツチャは部屋を出て行った。

どんな戦いをしてどんなチームでどんな人達なんだろう？ ワクワクとビクビクを抑えきれぬまま、みほは残りの授業を過ごしたことは言うまでもない。

交渉、始めます！

「なるほどね。それで私に声をかけたよ」

大柄な少女……熊野は試合記録が書かれているであろう、スコアシートを閉じると改めてみほ達へ目を向けた。

身長は170近くあるのだろうか？ 名前の通り大柄な彼女が、同じ3年生である角谷と並んでいるととても同い年とは思えなかった。

「確かに私に真つ先に声を掛けるっていうのはいい選択だとは思うよ。だけど」

「決定権は無いって言いたいんでしょう？ 私さ、そういう回りくどい言い方嫌いなんだよねー」

「またまた。杏が言えるような立場じゃないでしょおー？ 3年間同じクラスなんだし、そろそろ慣れてくれても良くない？」

「それはそうだけどさ……」

まだ何か言いたそうな表情を浮かべたまま、角谷は押し黙った。このまま続けても、結局はああ言えよう言うのの不毛な言い合いになることを察したのだろう。

なるほど、苦手って言った意味がわかったかもしれない。根本的に熊野さんと会長

は、同じタイプの人間だからなのだろう。

「わかった、わかったから。その話はおしまいにしよ。で、話を戻すけどさ、マーさん。それなら誰に聞けば言いわけ?」

熊野だからマーさん、なのだろう。

熊野は、んー? などととぼけるような返事をすると思わぬ一言を続けた。

「マーさん。私がお願ひしてるんだよ? 真面目に答えてくれても良くない?」

「答えるつもりはあるよ? 本当本当、だけどさ私達はチームだけど明確なリーダーとかはいないんだよね」

「……けど」

突破口を見つけたのだろうか。角谷はニヤリと笑うと熊野へ詰め寄った。眉間に皺を寄せながらも、熊野は角谷の次の言葉を待った。

「マーさんが試合の日程しかり戦車の修理しかり、チームのスケジュールを調整してるんだよね。まさにマネージャー。それなら、マネージャーの言うことを皆は聞くんじゃない?」

「……そう来たか」

3年生の同士の無言の睨み合いが数十秒続いた。みほはアワアワと口を動かしながらも、どうすることもできないでいた。やがて、熊野は降参と嘆く。

「話はしておくよ。だけど、決める権限は私にはない。そのところはハッキリしておいてよ。」

「りようかーい」

ブイサインなんかをしながら角谷がニヤニヤと答えた。

「で、最近話題の人物となりつつ……」

熊野はそう言いながらみほのほうへ視線を移した。

突然話題に上がったことに驚きつつも、みほは熊野の吸い寄せられるような視線から逃れることができなかった。

たった2歳しか年齢は変わらないはずだが、それでも十分すぎるほど貫録を秘めている視線に射抜かれたかのようにであった。

「あなたが噂の西住ちゃん？」

「え、ええ……初めまして、熊野さん……？」

「良いって良いって、マーさんで呼んでよ。ね？」

「あ、あははは」

誤魔化し笑いを浮かべるみほに熊野はさらに嘸みつく。

人付き合いの苦手なみほにとってその姿は、憧れでもありながらも僅かながら鬱陶しく感じるものだった。

角谷が止めようとするも、熊野のマシガントークは終わる気配を見せなかった。

「いつ来たの?」

「西住流ってどんな感じなの?」

「戦車は楽しい?」

「この前の大会見てたよー、惜しかったね」

「今年は勝てそうなの?」

答える間も与えぬ質問攻めに、みほは角谷に救いの目を向ける。

ようやく角谷が間に入り、熊野も渋々ながらも口をつぐんだ。

「あー、そろそろ時間だわ」

「時間?」

「そうそう、反省会の時間。良かったら来る?」

「遠慮しておくよ。さしがに悪いしね。西住ちゃん?」

「そうですね……私も……」

「あれれ? 何か疲れてるの? 大丈夫?」

いったい誰のせいだと思っっているんですか……。

心の中でそっと呟き、みほはため息をついた。角谷もみほの心境を察したのか、仕方ないよと小さく囁く。

ただ一人熊野だけは、キョトンとしたまま眺めているだけだった。

お断り、です!

「いやあ、やっぱり試合後の一杯は最高だね」

「オレンジジュースですけどね」

「神は言った! 私にコーヒーを飲めと!」

「砂糖を何杯入れるのですか? それはもはや砂糖水ですよ」

「も、もうやめて! これ以上注文しないで!!」

熊野と由多に突っ込みを入れながらも、ひたすらメニュー片手に注文をし続ける絵音に三上は悲痛の叫びをあげた。

彼女達4人は、試合のあと反省会と称した食事を毎回するようにしている。そして、その食事会の代金は試合で下手をこいた人が全額負担というルールを設けているのだが……。

スピード狂の血が騒いだ、などと言い絵音の指示を聞かなかった三上が今回の戦犯となっていた。

熊野と由多はまだ良い。歳にしては発育の良い体つきだが、一方はあくまでもおしゃべりをするため、もう一方は苦手なブラックコーヒーを克服するために集まっている。

問題は、車長の絵音だ。身長も体格も小柄な割に、ブラックホールの如き胃袋を持つ彼女、いつまでも食べ続けるといふ特性を持っていた。おまけに、自分が戦犯にならなかったことが無い物だから、理不尽と言えるほど財布からお金が消えていく経験が無い。

涙目になつて三上に、どうして泣いているの？ などと聞きたげな顔で絵音は運ばれてきた料理を食べ始めた。

「お客様はご注文どうなさいますか？」

「水でいいです……」

「かしこまりました」

「三上さんは食べないんですか？」

「食べると思ふのか！ この悪魔め！ 成敗でい！」

「悪魔！ 貴様！ 私が見えるのか！」

「あーあ、スイッチ入れちゃった。三上、どうにかしてよ？」

「勘弁してくれい……」

「……おいしいのに」

厨二病スイッチの入った由多を必死に宥めている姿を見ながら、絵音はなおも箸を進めた。熊野は、絵音がある程度食べ進め、デザートをメニューを注文しようとし始めた

とき話を持ち掛けた。

「そういえばさ、皆に話があるんだ」

「マーさんが込み入った話なんて珍しいですね」

「そうだな……大体良くない話でい!」

「この前のシベリア遠征の話はさすがに断るぞ……」

「あんたら、私を何だと思ってるの?」

そう言いながらも熊野は笑顔のままだ。実際熊野は、こうして4人で集まりワイワイと楽しむひと時を大切にしていた。

ゆえに、この話題を持ち出すべきではないことはわかっていた。それでもあえて話すのは、それが私達4人にとっての戦車道を変える劇的な何かかもしれないと信じているからに他ならない。

「私達の学校が戦車道を復活させたのは知ってるよね?」

「もちろんでい!」

「当たり前だ」

「はい、知ってます」

「実は生徒会長から打診が来たんだけど、ぜひ戦車道を受講してくれないかって」

「……」

沈黙が流れる。三上と由多は口をポカンと開けたまま固まり、絵音もフォークに肉を刺したまま動きを止めていた。

この発言が地雷だということは、熊野が一番理解していた。

「マーさん。私達は除け者、余り者。それを今さらどうこうって……」

「そうでい！ 私達がやりたいのは強襲戦車タンカスロンだでい！」

「わかつてる、わかつてるよ。絵音はどう思う？」

呼びかけられ絵音はよくよく我を取り戻したかのように、瞬きをすると考え始める。

この4人の中で、唯一戦車道の経験があり……そして誰より戦車道を嫌っているのが彼女だった。

「生徒会長ってあのちんちくりんな人ですか？」

「多分、絵音には言われたくないと思うぞ」

「絵音のほうが低いんだし。まあ、そう思われても仕方ないでい！」

「……どうせ私の事も調べてるんですよね？」

「おそらくは。それもあつてスカウトしに来たのだろうし。今の戦車道を引つ張っているのは西住流だしね」

「……嫌ですよ。もつと嫌になりました。戦車道なんかクソくらえですよ。おまえ他にの流派もいる？ 冗談じゃないです！ 我ら服部流を侮辱しているの等しい！」

興奮のあまり大きくなっていく声に、熊野は冷静にと声をかけ何とか抑えようと努めた。既に、ほかの客から好機の見線で見られていることに恥ずかしさを覚えていた。もつとも、由多は注目されている、などと興奮しているが……。

「わかったから、わかったからさ。落ち着こう? お客さん見てるしね」

「……すいません。少し声が大きくなりました」

どこが少しなの、随分大きかったよ。

そう愚痴りたいの我慢しながら、熊野は話を進める。

絵音が自分の家に伝わる、服部流と戦車道という武道に対して異常なまでのコンプレックスを抱いていたことは知っていたが、まさか普段声の小さい彼女がヒステリックに叫ぶまでとは想像できていなかった。

「絵音の気持ちは理解してるよ。だけどさ、これはある意味チャンスなんじゃないかな?」

「チャンス?」

「そうそう。服部流再興のためのチャンスだよ。あの西住流よりも強い! みたいなやつ」

「……必要ありませんよ。服部流に私はいません。私はいないことになってるんですから。どれだけ努力しても、無駄なんですよ」

「絵音……」

どこか寂し気に言う絵音に熊野はそれ以上声をかけることはためらわれた。三上や由多もさすがに空気を読んだのか、黙って首を振った。

「わかったよ。とりあえず、会長にだけは一度会って欲しい。断るならそれからでも遅くないでしょ?」

「……マーさんがそういうのでしたら」

声に抑揚なく言うと、絵音は残っていた肉を口に放り込んだ。

なんだが、いつもよりしよっぱい気がした。

決闘を望みます!

西日の差す生徒会室には、角谷、小山、河嶋、熊野、絵音の5人が集まっていた。1人だけ一年生だというのに、絵音はまったく戸惑いの色を見せない。それどころか、どこか不機嫌そうな表情を浮かべている。その姿に河嶋は、先輩に対して敬意が感じられないと声を荒げたばかりだった。

「まあまあ、河嶋。そう声を荒げることはないよ」

「ですが、会長……」

「曲がりなりにも、こつちからお願ひしている立場なんだからね」

今のところはね、と小さく呟く。

絵音はため息をひとつ付くとハッキリと言う。

「私は、戦車道を受講するつもりはありません」

「どうして? 戦車道を受講すれば、自腹で戦車の整備をする必要はなくなる。それに、

特典だつてたくさんついてはいるはずだけど?」

「そういう問題じゃ無いんです」

苦笑いを浮かべながら、角谷は熊野を見る。

だから言ったじゃない。私には決定権なんか無いんだって、そう言いたげな表情を浮かべながら熊野は角谷の視線から目を逸らした。

「何がそんなに気に食わないのか教えてくれるっていうのはどうだろう？」

「何を言っても良いんですか？」

「言うのは無料だしね」

「だったら……」

深呼吸をしながら絵音は目を閉じる。

数秒だか数十秒の沈黙の後、目をカッと開くと絵音は、その小さな体のどこから声を出しているのか疑いたくなるほど低い声で鋭く告げた。

「我ら服部流がほかの流派と手を組むなど言語道断！ 我ら精銳の戦いに生温い情や規則などいらす！ 勝って勝って勝って連戦連勝！ 勝利以外のものなど必要いらす求めず！ それがすべてなり！」

「なあ……」

「す、すごいですね……」

河島と小山はポカンとしたまま固まった。角谷もポーカーフェイスに努めているものの、内心では驚きを隠せていなかった。実際、3年以上付き合っている熊野も、その獣じみた文句を聞いたことはあったが、ここまでの迫力があるものを聞くのは初めて

だった。

ただ一人、絵音だけが満足げな顔で立っている。

そういうえば……。

角谷は、絵音の身辺調査をしていた際に見た服部流の原点ともいえるソレを思い出す。

第二次世界大戦中、日本は中国満州地方に満州国という巨大な国を建国した。だが、もともと末期になるにつれ防衛のための戦いを迫られるようになった日本に、自国とは海を隔てて存在する満州国を守るだけの力は残されているわけもなく、ソ連の侵攻により満州国はその短い歴史に幕を閉じることとなった。満州国を支配していた関東軍に一人の女戦車乗りがいた。彼女にとって、戦の勝ち負けなどどうでも良かった。満州に渡った理由も、決してお国のためなどという崇高な理念からではない。ではなぜ、彼女は異国の地へ鉄の馬と共に足を運んだのか……？

それはひとえに、戦うためだった。彼女は生まれたその瞬間から飢えていた。戦いという血みどろのクソのような、人間の汚点としか言えないその出来事に飢え続けている。関東軍残党となった彼女は、その後6年間に渡って、たった5輜の戦車を率いてソ連と闘い続けた。

一時は、ソ連の前線基地まで破壊せんと侵攻した彼女をソ連兵は畏怖の念を込めこう

呼んだ。

『首狩りの死神』と。その戦術は今の服部流にも継承されている。つまるところ、偽装や隠蔽といったものだ。その技術に対しては、どこの流派にも追隨を許しておらず、服部流の極意を学ばんとする門下生があとを絶たない。

そして鉄の掟がもう一つ……。

戦後、帰国した彼女たちに冷たい目を向けた他の流派とは手を組んではいけないという絶対原則。家出している身とはいえ、絵音は腐つても服部流の本家の娘である。その掟を進んで破ろうとは考えていない。

角谷は頭を抱えると打開策を考え始めた。

服部流が他の流派を恨んでいる理由。日本戦車道創設の際の冷遇。

数十年も前のこととは言え、他人が人の恨み言にどうこう言える立場ではないことを角谷はよく理解している。

ならば、どうすれば良いのか……恨みがあるというならば、いつそ……。

「よし、わかった！ だったら、こうしよう！」

「会長！ 何かいい案が浮かんだんですね！」

河島が希望の眼差しを角谷へ向けた。

これから自分が言うことに、一番驚くのは彼女だろうと考えながらも、角谷は無言で

ピースサインを向けると河島を安心させた。

「こうしよう! 西住ちゃんと勝負だ! もし西住ちゃんが負けたら私達は諦めるよ。だけど、もし……」

「私達が負けたら戦車道を受講しろと……」

クツクツと喉を鳴らす絵音は、誰がどう言おうとも弱者の首へ鎌を向け余裕の笑みを浮かべる死神そのものだった。

「良いんですか? 西住流如きが私に勝てるとう?」

「やってみなきゃわからないよ? それに、過去のわだかまりが捨てられないなら力勝負が一番効率的でしょ?」

「確かに……わかりました。では、後日詳しい日時を教えてください。こちらは、逃げも隠れもしません。もともと、戦いとなったら知りませんが……」

相も変わらず笑みを堪え切れないとばかりに声を漏らしながら、絵音は生徒会室を後にした。

後にも先にも、絵音のそのような姿を見たのはこれ一回きりだった。

皆のためです！

「はあ……」

「みほりん、大丈夫？」

「沙織さん……ありがとう。大丈夫だから……」

「会長も相変わらず強引ですね。何も相談せずに決めてしまうなんて」

放課後、生徒会室に呼び出されたあんこうチームの面々は、初めて絵音と試合をするということを聞いた。さすがに今回は、角谷も謝罪をしていたがみほは茫然とするしかなかった。

そして今、帰りに立ち寄ったカフェでみほの愚痴を聞こうという会は開かれていた。

「西住さん、そんなに落ち込むことはないんじゃないか？ その服部って人は即戦力になるんだろ？ むしろ良いチャンスじゃないか」

「そういえばそうかもね？ 私達にもいい試合になるんじゃない!？」

「違いますよ。西住殿が気にしているのは、試合をやることではありません。その相手が服部流というところですよ」

「戦車道の流派の一つなのですね。いったい、どのような戦法をとるのでしょうか」

「そうだよね。私がしつかり話さなくちゃ」

みほはようやく顔を上げると笑顔を浮かべた。

決して無理をしているようではない。むしろ、信頼する仲間によく打ち明けられるという安堵の表情が見られる。

「服部流はね、他の流派と同じように戦時中に生まれた流派の一つなの」

「なるほど。色々な流派がありますが、生まれたタイミングは同じなのですね」

「そうなんだ。だけどね……服部流は少し特殊なの」

みほは服部流の原点と言える、満州国での戦いの様をなるべく詳細に話した。話を進めていくにつれ、その流派がいかに実戦にのみ特化したものかをあんなこうチームの面々は理解していったようだ。

「なんか、物凄いな。ちよつと想像できないよ」

「うん。服部流は、最初こそ冷遇されていたんだけど、大会で結果を残すようになってからは注目されていったの。だけど……」

不自然に言葉を切ったみほに華が大丈夫ですか? と声をかける。みほは再び笑顔を浮かべると大丈夫だよ、と短く答えた。

「事件が起きたの。優花理さんは知っているかもしれないけど……」

「第35回大会の事件ですね」

「何があったの?」

今から30年以上前の話だ。

ある学校が服部流の学校と試合をしていた。今よりも戦車道は盛んであり、その試合が決勝でもあることから人々の注目度は高かった。新参者の学校と初優勝を狙う流派。これほど理想的な試合はそうそうない。

しかし、試合は人々の思うような流れになることは無かった。一方的な蹂躪。まだ戦車を十分にそろえられていないながらも、戦略で勝ち進んでいった新参者の学校に対して服部流は重戦車の集中運用による大火力で押し切る戦法をとった。

それは服部流の、一撃離脱戦法の鉄の掟とは正反対な戦いとなった。

やがて、最後の一輛となった新参者の学校は決勝戦では異例の降伏をすることを決め、服部流の隊長へと会いに行つた。しかし……

「服部流はそのまま、敵の隊長を拘束。建物の中に立て籠もった敵戦車に対して、機関銃で挑発しながらジワジワと苦しめ、最後は建物ごと破壊する、つてことをしたの」

「ひどいですね……」

「うん、それは……」

「なにそれ! 戦車道の試合でそんなの良いの!」

「そこです。もちろん、その試合は問題になりました。しかし、服部流の優勝が揺らぐこ

とはありませんでした。噂では、裏で多額の献金をして口を封じたと言われているが……」

「それから服部流と試合をする学校はなくなつたの。一步間違えば怪我人が出るかもしれない戦い方をする学校と試合をしたいと思う人はいないしね……」

孤立した流派の暴走を止める者も止められる者も誰一人としていなくなつた。やがて服部流の学校は衰退していき、最後は廃校という運命を歩んでいかざるを得なくなつた。門下生達は散り散りとなり、今でもそこそこの人気がある流派として存続はしているが後継者不足に悩むこととなつていた。

「今度やるのは戦車道の試合じゃない。もし、誰かが怪我をしたらつて思うと……私……」

「大丈夫でありますよ」

「大丈夫だ」

「ええ、問題ありません」

「そうだよ! みぼりんがいるんだもん! 私達はみぼりんを信用しているよ! 絶対大丈夫だよ! だから、私達を信用して!」

「沙織さん、麻子さん、華さん、優花理さん……そうだよね。私が信用しなきゃダメだよね! 皆、怪我をしないで必ず勝とう!」

「はいー」

全員がほぼ同じタイミングで返事をする。

友達になつてからの日は浅いのかもかもしれない。だが一緒に戦車に乗り、一緒に訓練をして、一緒に試合をした彼女達は、固い絆で結ばれていた。

戦車に乗るたびにその結束を固めていく。それが戦車道で学べることの一つであり、最も大切なことである。

勝つためには狡猾になる必要もあるかもしれない。それでも、心に反する行為をしてはいけない。ゆえに、みほは自分の信じている戦車道を突き進むために、何としても絵音を倒さなくてははいけないと心に誓った。

「まずは作戦会議ですな」

「うんうん！ いっぱい練習もしなくちゃいけないね！」

「朝早いのはやめてくれ……」

「冷泉殿はいつでも変わりませんな」

「皆！ 頑張ろうね！ それがほかのチームメイトの……皆のためになるはずだから！」

和気あいあいと作戦会議を進める彼女達を横目で見る少女がいた。少女は自分の流派を悪く言われたことをどうとは思っていない。それは事実であるし、むしろあの時の

行為を彼女は誇りに思っていた。許せないことはただ一つ。彼女達が戦車道を仲良くなる遊びと考えていることだった。

流派同士の争いです！

戦いの場合は、大洗女子学園の敷地内にある戦車演習場。

非公式の戦いではあるが、戦車道連盟から来ていた蝶野が臨時の審判として試合を取り仕切る事となった。

両者に不利がともわないよう、ルールは強襲戦車タンカスロンでありながらもアンコウチームはIV号戦車D型を使うことを許されていた。

それが、絵音の過信からくる油断なのか？ それとも対等の勝負をするために、まだ戦車には不慣れなあんこうチームを気遣つての配慮なのか。真実はわからないが、単純な戦車性能だけで見れば、みほに有利なように試合が運ぶと予想された。

だが、相手は3年以上チームを組み、試合を重ね、異名を得るまで暴れ続けている名チーム。その魔の手によって捕食されぬよう、みほにも一寸の油断は許されてはいない。

戦車道の試合と同じく、みほと絵音が静かに近づいて行つた。

この試合に勝たねばならない。ここに勝たずとも、天地が真逆になるような事でも起きない限り、大洗女子学園の戦車道は続いていくだろう。それでも、ここで彼女達を

チームメイトとして加えられなかった場合の代償は大きい。ましてや、同じ学校であるのに、同じ戦車乗りであるのに、過去のわだかまりによって相容れない、というのは胸がモヤモヤする。

絵音は、黒いタンクジャケットを羽織っていた。その姿からは、普段の引っ込み思案な様子など窥えない。

自分こそが車長であり、自分の指示こそがチームの明暗を決める。ゆえに、私が全てであり、私がこのゲームでの王^{キング}である。私の覇道を、何人たりとも邪魔などさせない。

そのオーラがそう物語っていた。

みほも負けはしない。勘当された身であろうとも、自分にはまだ戦車に乗らなくてはいけない理由がある。

今のチームメイトのために、負けはしない。屈しはしない。

「両者、握手」

「よろしくお願ひします!」

「よろしく」

蝶野の一声により、二人は握手を交わした。

絵音の手は、思っていたよりも小さく熱かった。決して少女の手ではない。戦車に關わる家に生まれた身として、生まれたその瞬間から戦車に携わってきた者が持つ独特の

手。

油臭さと鉄の匂いにまみれた鋼鉄の腕。

「西住さん。勝つのは私だ。これは強襲戦車^{タンカスロン}。仲間には怪我をさせたくなかつたら、早々に引くことを提案させてもらいたい」

「それはダメです。ここまで、服部さんと約束をとりつけるのも大変だったでしょう。会長の想いを、私は無碍にはできません。ですから……私は戦います」

「くくく……そうですか。でしたら、せいぜい頑張ってください。鋼鉄の箱に閉じ込められて、死なぬよう。そこは棺桶ではなく戦車。戦う事から逃げた流派の一派が、どんな顔で乗れるという。戦いに特化した服部流^{わべら}を打倒など不可能。あざけ笑うのは、私の番だ」

「ちよつと。これはあくまでも、敵同士の戦いじゃないのよ。そこまで言う必要はないのじゃないかしら？」

見かねた蝶野が口を挟む。

確かに、今の言い様は挑発の域を越えていた。

試合前に、相手の精神状態を揺さぶるため、あえて煽るような行為をするチームもある。しかし、決して彼女たちは仲が悪いわけではない。

試合後には、食事をして会話を交わす。そして、次回また戦うまでにお互いを切磋琢

磨する好敵手ライバルとなる。

今の絵音にはそれがなかった。

完全なる私怨。そのためにだけに動いていた。

「それはすみません。気を付けます。では……」

遠ざかる絵音の背中をみほは、静かに見つめた。

流派の激突です！

「どう動いてくると思いますか？」

「服部流は偽装が得意と聞きます。なにせ、遠い満州の地でたった6両であのソ連の機甲師団と戦い続けた部隊が元となった流派ですから。ですが、当時の日本国民からも……あまり快くは思われていなかったようでありますね」

「なんか、怖そうな流派だね。みぼりんの西住流とはまた違うの？」

「そうだね……全然違うかな……だけど、うーん……上手くは言えないけど似てるのかもしれない」

みほ脳裏に浮かんだのはあの光景。

味方を助ける者が誰も出なかったというあの状況。

助けたがゆえに、試合に負け、そしてその責任を問われたあの惨状。

どちらも耐えることができずに、黒森峰を去っていくことを決意した。

非人道的。そういう意味では、服部流も西住流も似ているところがあるのかもしれない。
い。

「ですが、みぼさんの西住流は違いますよね？」

「え……?」

「そうだな。西住さんは仲間を見捨てたりしないだろ」

「そうですよ、西住殿!」

「うん! そうだよ! 仲間を見捨てるなんて、別れた男のことをすぐに忘れるくらい酷いことだよ!」

「沙織さんは、お付き合いの経験が無いはずでは……?」

「もう、華! そういうことは言わないでよ!」

空に赤い信号弾が撃ち上がった。

試合開始の合図だ。

時間は2時間。どちらかの戦車が行動不能となった時点で決着がつく。

「それでは行きます。みなさん、よろしくお願いします」

「はいっ!」

「PANZER パンツァー VOR! フォー」

IV号がゆっくりと動き出す。

たった数日しか戦車道の練習をしていないとはいえ、誰もがその能力をいかに発揮しており、目を見張るほどの上達ぶりを示していた。

キューポラから顔を出し、みほは敵戦車を探す。

直接見たことがあるわけではないが、自動車部からの情報だと絵音はテトラーク軽戦車を使っているらしい。イギリス製の戦車で最高速度は56 km/hと、IV号よりも圧倒的なスピードを出すことができる。

機動力、防御力、攻撃力。どれもが当時の同ランクの車両に比べれば最高水準のものだろう。

「それでも……」

それでもIV号の正面装甲を抜くのは容易ではないはず。おまけに、こちらの攻撃をまともに受ければ無傷では済まない。

狙うとすれば、足回りの強化ゆえに劣化したとも言えるところ。旋回時に通常よりも、旋回半径が大きくなるという欠点。

みほは固く目を瞑ると、絵音打倒のための案を再度検討し始めた。



「で、どうするんでい！ こんな訳のわからない被り物を愛しのテトラークにさせやがって」

「本当だ。これでは、私の狙撃能力が十二分に発揮されない。まことに遺憾なり」

「そう、言わないでください。この勝負、服部流がいかに優秀で、そして他の流派よりも有力かを示すいい機会でもあるのですから」

「それとこれが関係するど?」

由多は不思議そうな顔で上を指差す。

もちろん、その先にあるのは上部装甲だが誰もそんなことは思っていない。

由多が言いたいのはそのさらに上。テトラークをスッポリ隠してしまうような、偽装のことだ。

戦車全体を覆うように、民間用のトラックを模した偽装が施されていた。細部まで細かく特殊なカーボンで再現されており、履帯まで外しておくという慎重ぶりだ。

これは、テトラークがクリスティー式を継承しているからできる荒業であることは間違いない。

「皆さんは、R. U. S. Eというゲームを知っていますか?」

「ルーズ? 時間にルーズってわけかい?」

「そんなバカな話なわけじゃないですか。三上さん、もう狂ってるんですか?」

「絵音、お前……あとで覚えておけよ?」

「はい?」

絵音は何の話だ? と言わんばかりに首をかしげる。

由多と三上からは、思わずため息が漏れた。

「話を続けますね。R. U. S. Eというのはフランスの戦争シミュレーションゲーム

なのですが……これがなかなか面白いんですよ。私、あのゲームのことはなかなか気に入ってしまってますね」

「それで、結局何を言いたいんだ？」

「その中で、今やっているように民間のトラックや軍用トラックに戦車をカモフラージュする技術があるんですが……まさか史実でもやっていたなんて。すごいですね！」

「ちよつと待て……つまり、まさかとは思いますが。絵音、お前もしかしてだけどさ、そのゲームの真似をしたがために、こんなハリボテを戦車につけたって言うんでい？」

「そうですよ？」

「……さ、さすがは我らが車長……この異次元の狙撃手ですら未来予測できない答えを……」

「褒めてるんですか？　ありがとうございます！」

三上は再び大きなため息をつき、そういえばと思いつく。

チームを結成した最初の方、何を思ったのか氷河で空母が作れるなら戦車も作れるのでは?! と叫んでいた絵音がいたことを。

さすがにほかのメンバーで猛反対したため、あの時は折れたが……。

「ゲーマーも行き過ぎると何を言い出すかわからんでい」

「さすがに、私も今回はな……真面目に戦うつもりはあるのか？」

「一応は、この偽装もそれなりに効果がありそうだけど……由多も呆れてるってことはなあ……」

「何かその言い方はひどくないか？」

三上と由多は、絵音に気付かれないように舌を出すと戦闘モードへと入った。

ゆつくりと、前進です！

森の中を一台の偽装トラックが疾走する。

その重そうな巨体に対して、速度はゆうに60km/h近くは出ているだろう。

目指す地点はただ一つ。

この偽装を最も効率よく活かせる場所。

「あー、たく。ただでさえ視界が悪いっていうのに、もっと悪くなってるでい！」

「おまけに、発砲禁止だと？ これでは私の力を十二分に発揮できないではないか」

「本当だ。これだから私達の隊長は……」

「ああ、後でマーさんに文句を言おう。どうせ、この作戦を入れ知恵したのはアイツだろ。あれはまさしく悪魔だ」

「悪魔かどうかは知らんが、私達のことをもっと考えるようには言わなきゃいけないな」

『そうかいそうかい。私が何も考えていないと。おまけに、悪魔』

「ひいっ！」

三上と由多が同時に悲鳴を上げる。

恐る恐る振り向くと、無線機を彼女達のほうへ向け笑顔の絵音がいた。

「ど、どうして……」

『ちよつと今後の話をしようと思つたらこれだよ。あんた等……覚えておきなよ』

「ごめんなさい!」

「申し訳ないと思つている! ゆえに、許してくれ!」

二人の本気の謝罪を聞くことなく、通信が切れた。

絵音は覗き窓から外を見て、敵がいなことを確認すると由多に小さな声で質問をする。

「何を怖がつているんですか? マーさんは良い人じゃないですか」

「罰ゲームを受けたことない人にはわからないのだ……ぬうう……一生の不覚」

「罰ゲームって、いつもファミレスでやってるやつのことですか?」

「そうだ。なんだお前、知らなかったんでい?」

会話に入っていた三上に、絵音はキョトンと首をかしげる。

見る人から見れば、その小さな体からしてロリ萌えなどと言うのだろう。

もつとも、彼女の本性を知っている二人は次に出てくる言葉に予想がつき小さくため息をつきたくなっていた。

「そうだったんですか。てつきり、活躍できなかった人が可愛い後輩である私におごるためにやっているのかと」

「アホ抜かせ！ 三上、こいつここで降ろそう！ いいや、ロープで縛って引きずりまわそう！」

「そうだな、それが良い」

「何を言ってるんですか？ 私がいなかったら、この試合勝てるんですか？」

「……」

確かに、と彼女達は思い直す。

どれだけ憎まれ口を叩こうとも、戦車道に対してはどう転んでも追いつけない才能を持っている絵音がいなくては試合には勝てない。

仲間割れで試合に負けるなど、プライドが許さない。

「あとで覚えてろ……」

由多の小さな眩きを最後に、その話題は流れた。

間もなく偽装テトラークは森を抜け、ある施設へとやってきた。

今回は、そこも試合会場となっているため今日は無人となっている。

普段は学園艦の物流の中心となる場であるが、戦車道の試合が優先となっていた。

そして、そこだからこそ……偽装テトラークと同じような形をした本物のトラックが大量に駐車してあった。

念入りに作られた偽装との差はほとんどない。

ここに紛れ込んでしまえば、かなり至近距離まで近づかなければ判別は困難だ。

そして、絵音には西住流がここへ来ると確信に近い考えを持つていた。

「どうしてここに来ると思うんだ」

「簡単な話です。あの流派は逃げるようなことは絶対にしない。だからこそ、今回のステージの最深部であるここで待つていれば良いんですよ。こっちは風潰しに私達を探す相手を待つだけで良いんですから。おまけに、IV号の装甲が抜かれるはずがないという、相手の油断を突くのがポイントです」

「言ってる意味が分からんぞ」

「つまりですね、確かな兵站があることを基本として成立している西住流は強襲戦車競技には向いていないということですよ」

「もつとわからなくなつたぞ……」

嘆く由多に同情しながらも、三上は考えをまとめた。

要約すると、隠れる場所や障害物の多い流通センターに私達がいると考えるであろう敵は、まずここへやって来て一つ一つ風潰しに確認しながら、搜索エリアを狭めていくと言いたいのだろう。その隙を突けば、脆弱な場所を狙撃できるタイミングがあると……。

もつと簡単に言えばいいのに……。

三上は心の中のため息をつきながら、エンジン音が響かないようにした。

優秀な戦車長は、自車のエンジン音と他の戦車のエンジン音を聞き分けられるらしい。たとえば、同じ車種だとしても、その使い手や歳月によって些細な違いは出る。

絵音がそこまで出来るのかを確認したことはないが、彼女ならそんなことも出来ないんですか？ などと言いついで聞くことが出来ない。

「来ました……」

三上はハンドルを握り、由多は標準を合わせる。

紺色のIV号は、一つ一つ確認するようにゆっくりと近づいてきていた。

その距離はおよそ500m。

当てられないことはないが、正面装甲を抜くことができない。

もつと近く、さらに近く。

ギリギリまで近づき、側面か背面を抜くことが求められた。

ここまで来てしまえば根競べだ。

汗で手が滑らぬよう、タオルで手をふく。

何十もの戦場を戦い抜いてきたとはいえ、この瞬間だけは慣れることはない。

ただ一人、絵音だけは涼しい顔をしたまま命令のタイミングを凶っていた。

「残り200になったら急発進。すれ違いざまに、側面を撃ち抜きます。出来ますね？」

「ああ」

「当たり前だ」

命令を下し、絵音は再び沈黙を続ける。

IV号がジワジワと距離を詰めてきていた。

油断大敵です！

「うーん……」

「どうしましたか？」

「ううん、何か嫌な予感がするような……」

「嫌な予感でありますか？ それは例えばどのような……」

「……！ 麻子さん、止まってください！」

「わかった」

IV号が緊急停車をした、そのわずか数秒後。

目の前を砲弾が飛び去って行った。

砲弾はIV号に掠ることもなく目の前を通過していくと、壁を破壊する。

「あそこから来たんじゃない!?!」

「あれは……!」

一台のトラックが徐々に動き始めると、急発進をする。

よく見るとタイヤの数が普通のトラックよりも多い。

「偽装……! 追ってください麻子さん!」

「了解」

麻子がIV号を発進させる。

本来ならば、20km/h以上のスピード差があるため見失う可能性が高いが、偽装してあるテトラークではトップスピードを出せないのではないかというみほの考えから、追跡を始めていた。

その判断は正しく、つかず離れずの距離を維持したままIV号はテトラークの後ろにピツタリと張り付いた。

後ろを取っているみほたちが有利であることは明々白白であり、それをわかっているからこそ、テトラークは急な方向転換をするなどして、どうにか追跡を振り切ろうとしている。

しかし、天性の才能とも言える麻子のドライビングテクニックによりその目論見が達成されることはなかった。

トラックの荷台にあたる場所から、誰かがこちらを睨み付けてきた。

黒髪をなびかせ苦々しい表情をしている彼女は、試合前までの余裕の笑みを完全に無くしていた。

やがて二台の戦車は森を抜け、草原へと飛び出し停車した。

○●○○○

「ほら、絵音中に入つて。危ないよ」

「私は……私は……西住流如きに負けるわけにはいかない！」

「それはわかつたから、ほら早く！」

由多に手を引つ張られ、絵音は車内へと戻つていく。

目が合った。西住みほと目が合った。どうして、どうしてそんなに満足そうな顔をして戦えるの？ これは試合。それも、戦力を獲得できるかという大事な試合なんじゃないの？ なのに……

「どうして……」

「絵音！ この先は草原だ、どうする！ タイマン張つてやりあつても、そうそう簡単には装甲を抜けないぞ！」

「私は……そんな顔をして試合なんかしたことない……これは試合……ある意味競争よ。それを……」

「絵音！」

「へっ……」

三上に怒鳴られ絵音は正気を取り戻す。

怒りからか、悲しみからなのか、それとも何かに対して怯えているのか、絵音の手は小刻みに震えていた。

その手を由多が握る。

「こんな時に気の利いたことを言えるわけじゃないが、私たちは一人じゃない。そうだろう？」

「一人じゃない……」

「さあ、どうするんでい！ 敵は目前まで迫っている。ここから私たちはどう動けばいい」

絵音は彼女たちと出会った日を思い出す。

それぞれが何かしらの事情を抱え傷つき、その果てにたどり着いたあの場所でそれぞれが支えあえば生きていけることを学んだ。

強い絆で結ばれるために戦車道を始めた。

前までの私にはいない。

私はもう一人じゃないのだから。

「こうなったら正面から撃ち合います。私も装填は急ぎますので、皆さんもそのつもりをお願いします。個々の能力はこちらが高いはず。必ず撃破できます」

「了解！」

初めての罰ゲームです！

「停止っ！」

ただっ広い草原で向かい合っているのは、テトラーク軽戦車とIV号中戦車。

テトラークは綺麗に整備されているが、IV号に関してはまだに放置された名残である錆が、見えにくい場所に所々残っていてお世辞にも綺麗とは言えない。

「そんなことは関係ない……必ず……私が西住流をつ！」

冷静沈着が取り柄でもある車長が、怒りの感情を露わにしていることに不安を覚えつつも、三上と由多は静かにその時を待った。

両者共に動く気配はない。

この距離ならば、初弾を外したほうが負けることは確かだった。

ゆえにお互いに慎重になっているのだろう。

しかし……

「合図したら行きます」

「本当かよ。どうやってあの戦車の裏側を取るんかい！ 真正面は抜けないぞ」

「大丈夫です。機動力を活かした攻撃にします。こちらとあちらのスピード差は20k

m/h以上。さらに、私達の方が砲弾も軽く、装填も早い。より多くの砲弾を撃ち込みます」

「具体的には?」

「まずは、相手の機動力を奪うため履帯を徹底的に攻撃します。リトルジョン・アダプターのついたこちらの砲ならば、通常のものより威力がありますし、由多さんの技術なら可能ですよ」

「当たり前だ。私を誰だと思っている? 私は…」

「三上さんは……」

由多のくだらないお遊びには付き合えない、と言わんばかりに無視を決めこむ絵音。

やることは至極単純。

向き合っている今だからこそ、初弾をかわし相手の側面へ行き、履帯に攻撃を集中させ、完全に身動きが取れなくなったのを確認した後撃破するといふもの。

時間はかかるが、これは単に何もできないまま戦^{てつかんおけ}車に閉じ込められるという、乗員に恐怖を与える方法だった。

これで私は……この学校から西住流を排除する。

何か言いたげな目で三上と由多がこちらを見ていたが、あえて何も反応をしない。

どうせ冷静じゃないとか言い出すのだろう。そんなことはない、私はかつてないほど冷静なはずだ。

「前進！」

気を読み、絵音は鋭く指示を飛ばす。

両手には既に、次に装填するべくする弾が握られていた。

突然のテトラークの行動に慌てたように、IV号が発砲するも砲弾は明後日の方角へ飛んでいき、小高い丘へと着弾した。

勝った！

IV号の砲塔旋回能力から見ても、一度懐へ潜り込みさえしてしまえば、二度と私達に照準を合わせることなど出来まい。

「ははは……」

笑いが漏れた。

何が楽しむだ。

これは戦車道であつて、戦争なのだ。

どちらかが勝ち、どちらかが負ける。

一歩間違えれば、命の危険すらある。そんなものを楽しむなど戦車に対する侮辱ではない。

「はは、ははははー!」

笑いが止まらない。

これでっ!

「終わ……!」

そう叫ぼうとした絵音に衝撃が走る。

天地がひっくり返るような感覚に襲われた後、ぼんやりとした頭を何とか覚醒させようとする。

「なに!? 何が起きたのですか!」

その言葉への答えのような放送が、フィールドに響き渡った。

「テトラーク走行不能! よって、IV号の勝利!」

●●○○○

「くっそー! あと少しで勝てると思ったのに!」

「またしても……私の実力を発揮する機会が……くっ、次こそは必ず」

「と、いうことで。正式に私達は戦車道を受講することになったから。すぐにでも大会の抽選会があるらしいし、早く他の面子とも顔合わせしなきゃねー」

「わかってるでい!」

「私の霊圧によって押し潰されなければ良いのだが」

「どうして……」

試合後にいつも訪れるファミレスに四人は集まっていた。

なぜか、普段はドリンクバーだけしか注文しない三上と由多が親の仇のように大量注文していたことに気が付いたのは、熊野だけだった。

ただ一人、絵音だけはどうしても何かに憑り付かれたかのように呟き続けた。

「でもまさか、車両をぶつけてくるなんてね」

「IV号とテトラークは10t以上差があるからね。トップスピードのこつちが壁に突っ込んだみたいなものでしょう?」

「もしかして、マーさんから見ると、IV号はわざと初弾を外したとか?」

「そうじゃない? もともと当てるつもりなんかなかったんでしょ? どうせなら、

体ごとみたいな?」

「大胆っていうか何て言うか……」

「ところで絵音ー!」

「ひゃいつ!」

間抜けな声を出す絵音に熊野が軽くデコピンをする。

「いつまで呆けてるの?」

「呆けてない!」

「もう、嘘はつかないの。あんたに色々あるのは知ってるけども、結果を潔く受け入れることも大切だと思うぞ」

「わかって……ますよ……」

「ほれほれ」

「ほいほい」

「ちよつと、やめてくだ……あははは」

身をよじりながら、くすぐりを続ける三上と由多から逃れようとする絵音。

だが、次の瞬間。急に真顔になった由多と三上がニヤリと笑う。

冷たいものが背筋を走る感覚がする。

「ところで、今回負けたのは誰のせいだい?」

「ふつ、そんなの決まっているだろ?」

「今回は、私も異論はないよ」

「ひ、ひい……」

この後、絵音が優しい先輩によって、財布が空っぽにさせられたの言うまでもないのであった。

服部流です！

ある流派の話をしよう。

なに、そうかしこまることはないさ。

この話は、たった一話で完結してしまうような軽いものではない。だから、聞き手だけじゃなくて話者もそれなりに疲れてしまうんだ。

それでも、いつか話さなくてはいけない大切な話だ。

これを知っていてこそ服部流の一員であり、これを語り継いでこそ、真の門下生と言えるだろう。

素質があると思うなら、一族以外にも話してもかまわない。

もつとも、そんな奴が今まで出てきたことはなかったし、話したところで信じてもらえるわけがないと思うけどな。

お前が知っている服部流の起源は何だ？

そうだな。服部流のルーツは第二次世界大戦の満州にまで遡る。

耳にタコが出来るほど聞かされているかもしれないが、改めて話をさせて欲しい。

第二次世界大戦中、日本は中国満州地方に満州国という巨大な国を建国した。だが、

もともと末期になるにつれ防衛のための戦いを迫られるようになった日本に、自国とは海を隔てて存在する満州国を守るだけの余力が残されているわけもなく、ソ連の侵攻により満州国はその短い歴史に幕を閉じることとなった。

満州国を支配していた関東軍に一人の女戦車乗りがいた。彼女にとって、戦の勝ち負けなどどうでも良かった。満州に渡った理由も、決してお国のためなどという崇高な理念からではない。ではなぜ、彼女は異国の地へ鉄の馬と共に足を運んだのか……？

それはひとえに、戦うためだった。彼女は生まれたその瞬間から飢えていた。戦いという血みどろのクソのような、人間の汚点としか言えないその出来事に飢え続けている。関東軍残党となった彼女は、その後6年間に渡って、たった5輦の戦車を率いてソ連と闘い続けた。

一時は、ソ連の前線基地まで破壊せんと侵攻した彼女をソ連兵は畏怖の念を込めこう呼んだ。

『首狩りの死神』と。その戦術は今の服部流にも継承されている。つまるところ、偽装や隠蔽といったものや一撃必殺の強襲戦法だ。その技術や戦法に対しては、どこの流派にも追隨を許しておらず、服部流の極意を学ばんとする門下生は今でもあとを絶たない。

そして鉄の掟がもう一つ……。

戦後、帰国した彼女たちに冷たい目を向けた他の流派とは手を組んではいけないという絶対原則。

そんなことは知っている？　だから言ったただろう？　知っていると思うが話させてほしい。

なるほどね、確かに満州の地を駆ける女兵士。

これほど軍神として崇めやすいようにキヤスティングされたものはないだろうね。話の真相はこうさ。

満州国がソ連の侵攻によって滅ぼされたことを、最前線で聞いた戦車部隊があった。部隊は帰るべき国を失ったことで混乱を極めた。

その時、たまたま一番階級が高かったのが服部流の創設者のその人だった。

前日の戦車戦で部隊長を失い、さらに国すら失う。

戦争という大きな渦に放り込まれたまま、助けられる可能性がないことだけを突き付けられるのは、さぞ絶望的だったであろうな。

彼女は決断するしかなかったのだよ。

前に進むと。

後ろに下がれば、むぎむぎ殺されに行くようなものだ。

ならば、少しでも前へ進み、敵前哨基地が手薄になっている可能性にかけたんだ。

進軍していくにつれ、仲間が死んでいった。

ソ連の庭で戦っているんだ。

警備が手薄になっているとはいえ、対戦車地雷に対戦車砲。いくらでも脅威はある。とうとう、残りが五両となったところで彼女はついにソ連の前線基地の一つを占拠することに成功した。

しかし、うかうかと居座れるようなことは出来ない。

ありつたけの砲弾と食糧を戦車へと積み込むと彼女達は再び満州の荒野へと旅立っていった。

今日はここまでにしよう。

やばり、疲れてしまったよ。

必ず続きは話すさ。

今はおやすみ、絵音。いい夢を見るんだよ。

車長集合です！

「絵音っ！ 絵音ってば！」

「ん……？」

「なに寝ぼけた顔してんでい！ 今日車長だけで顔合わせをする日なんだろう？」

「あ……そういえば……」

「もう遅刻でい！ さあ、行った行った！」

部屋にいるのは絵音と三上だけだった。

わざわざ起こしに来てくれたというのだろうか？

「……ありがとうございます」

小さく礼を言うと絵音は廊下へと出る。

集合場所の生徒会室は同じ階なので、そう時間はかからないだろう。

私としたことが、大事な会議の前に寝坊してしまうとは。確かに、あまり乗り気ではないのは事実だ。しかし、勝負に負けてしまったのだからある程度のケジメは付けなくてはいけない。どれだけ嫌だと思っても、表面上だけでも協力しているように見せなくては、一族の恥晒しとなってしまう。

「一族か……」

追い出された身でありながら何を心配しているのだろうか。

服部流などなくなってしまうえば良いと数週間前までは思っていたはずなのに。まったく、西住みほがこの学校に来てからというもの何故か上手くいかない。

「久しぶりにあんな夢見たな……」

服部流の起源を話してくれたのは誰だっただろうか？

祖母か母か姉か。

いつも寝るちよつと前に話し始めるその話を私は真剣に聞いていたが、最後まで聞けずに寝てしまっていた。

「一回くらい、最初から最後までしつかり聞いておきたかったな……」

生徒会室へと静かに入っていく。

みほと会長の姿が真っ先に目に入ってきた。

応接用のソファには、奇抜な格好をした者や何故か部活のユニフォーム姿の者がいたが、あえて触れないことにした。

「やあやあ、絵音ちゃんー！ 待ちくたびれたよ」

「申し訳ありません。昼寝をしていたら寝過ごしました」

「ね、寝過ごしただと！」

「川島ー、うるさい」

会長に手招きされ絵音もソファへと腰掛ける。

「じゃあ、始めよつか。まずは、西住ちゃんねー」

「よろしくお願いします」

「で、磯部ちゃんー」

「よろしく！ 何事も根性だ！」

バレー部のユニフォームを着た磯部が気合の入った声で叫ぶ。

うるさいな……。

心の中でつぶやきながら、絵音は視線を次の人へとズラす。

「次はカエサル」

「カエサルだ！」

赤いマフラーをトーガのように羽織っているコスプレ少女が自信満々に自己紹介をする。

あまり近づかないほうがよさそうだな……。

どこか由多と同じような厨二病臭さを感じた絵音は、思わずため息をつく。

「一年生の澤ー」

「澤 梓です！ 絵音ちゃんとは実は同じクラスなんだよ？ 仲良くしてね！」

馴れ馴れしい……そもそも同じクラスなんて初めて知ったぞ……。

澤がキョトンとした顔でこちらを見る。

無意識に睨んでいたのだろうか。

絵音は平静を保つよう自制すると、最後の一人を見る。

「で、私も車長なんだよねー」

「でしようね」

その言葉があまりにも無感情なものだったからだろうか？

部屋の温度が一気に下がり、全員が冷たい視線をこちらへ向けているように感じられた。

こんなくだらないチームの仲間にならなくてはいけないのか。

根性と言う筋肉バカ、コスプレの一つとでも考えているようなアホ、極端に馴れ馴れしい奴。

まともなのは、西住流の彼女だけか。

二回目のため息が出る。

大会に出たところで一回戦敗退は必至だろう。

むしろ、その方が良い。

こんな茶番は早く終わらせて、私は私の戦車道を貫きたいのだから。

「じゃ、次は服部ちゃん。自己紹介してよ」

「……服部絵音です。どういう因果なのか、戦車道を受講することとなりました。正直、あなた達に何を期待すれば良いのかわかりません」

「……」

「試合に勝ちたいのであれば、お遊びの気持ちなど捨てないといけない。それなのに、何ですかこれ？　ここはコスプレ大会の会場ですか？　私は決してあなた達を同じ戦車乗りとは認めません。私は、私の認める人だけでチームが組めていればそれで良いのですから」

「……」

シンと生徒会室が静まり返る。

角谷以外の全員が、目を見開き絵音を凝視していた。

最初に声を上げたのは、予想通り川島だった。

「貴様っ！　何て口をきいているのだ！　遊びだど!?　そんなことを思っている奴は一人もいないぞ！」

「ふん、ご冗談を。私には、あなたが言っていることこそ馬鹿げているとしか思えない」
「なっ……!　言って良いことと悪いことの……!」

「川島、ここで喧嘩なんかしてもしかたないでしょ。ま、服部ちゃんには特に強制的に

受講させたようなものだし、少しくらい多めに見てあげなよ」

「ですが、会長……! これでは我々上級生の面子がつ!」

「そんなこと気にしてもしかたないでしょ。カエサルと磯部ちゃんは気にする?」

「そうですね、根性の底力見せてやりますよ!」

「別に気にはしていない。この格好は私の魂だ。他人にどう思われようと、私は曲げないし曲げる気がない」

不愉快だ……。

……。
ここまで言えば、万に一つの可能性で受講することを拒否されると思っていたのに

折れない心、それとも鈍感なだけか?

絵音は黙って、一回戦の概要を聞くことにした。

協力するのです！

「では、第一回戦の相手を発表する。と、言っても服部以外は知っていると思うが」
やけに河島がためる。

どうしてそんなにも渋る必要があるというんだ。負ける可能性のほうが高いのだから、どこが相手だろうと関係ないだろう。

絵音は戦車道大会に出るであろう学校の姿を思い浮かべる。

そもそも、全国戦車道大会など謳ってはいるが、実際のところ満身に練習ができ試合に参加できる学校は数えるほどしかない。

おまけに、いつからついた風習なのか全国大会に出ることの出来る学校と出来ない学校などという、くだらない格差まである。

かつては強豪校の一角として名前を連ねていたとはいえ、数十年前の話。しかも、戦車道が復活して数か月しか経っていない大洗女子に参加の資格などないと断言してもかまわないはずだ。

抽選会の時もさぞ、冷たい視線を向けられたのだろう。

「どうせ、何をしても変わらないのだから。勝てる未来なんてない」

「……それはわからないさ」

カエサルと名乗ったコスプレ少女が絵音に真剣な眼差しを向ける。

ここにいる誰よりも、戦車道の技術と知恵をもっているはずだ。臆することなどない。私はどうしようと、この場で胸を張りながら発言ができるはず……そう考えていた。

だが、カエサルの視線が痛い。胸に突き刺さるこの痛みはいつたいなんだ？

何も言い返すことが出来ないまま、絵音は視線から逃れるようにそっぽを向く。逃げてしまった。

「相手は知波単学園だ」

「知波単学園……」

千葉にあり、旧帝国陸軍の風潮を受け継いでいる学校だということでも有名だ。もちろん、全国大会戦車道大会の常連校でもある。

同時に万年、一・二回戦で敗退していく学校でもあった。

試合の中盤までは、主力戦車であるチハの機動力と隠蔽を活かした戦術をとりゲームを有利に進めているのだが……。

「この学校の最大の弱点は、とっかん 呐喊魂がうずいてしまうことだ」

「呐喊魂？ 根性のようなものですか!？」

「いまいち噛み合っていないが、要するにだ。この学校はいい意味でも悪い意味でも

旧帝国陸軍の精神を受け継ぎすぎているがゆえに、無謀な突撃作戦を繰り出し毎回敗退している！ 私たちでも、その突撃作戦の隙をつけば勝てるかもしれない！ そうですよ、会長！」

「まあ、でも。今年隊長になった西つていう人は、その思想を変えるために四苦八苦しているらしいけどねー」

角谷がお茶をすすりながら答える。

むしろ、今までどうしてその精神を改革しようと思うものが出なかつたのだろうか。伝統などというくだらないしがらみに憑りつかれていたのか？

「しがらみに憑りつかれているのは私も……」

「それで、西住隊長！ どのような作戦をとりますか？」

「ええと……チハの機動力は私たちの持つているほとんどの戦車よりも高いです。なので、試合の序盤はIV号と八九式、そしてテトラークと38tによる陽動作戦をします。目的は、足回りの弱いチハに少しでも負担をかけるためです」

「なるほど……まずは、足を潰すというのか」

「はい。ゲーム中盤以降は、あらかじめ丘の上に展開している、M3とIII号突撃戦車と合流して一斉砲撃で倒します」

「わかりました」

絵音は何も言わない。

別にこの作戦に不満があるわけではない。

むしろ、素人でも「ただ逃げる」ならばできるはずだし、高所からの射撃を行うのは常とう手段だ。

最悪の場合、フラッグ車を潰せば勝てるフラッグ戦であるのだから、自由に動くことができるIV号とテトラークで相手のフラッグ車を襲う、などという作戦に変更することもできるはずだ。

ゆえに、この作戦に不満はない。

それでも、勝つ未来は一向に見えてこない。

「だからこそ……」

作戦を詰めている車達をよそに絵音は静かに、生徒会室を後にする。

角谷がこちらに気が付いたようだが、何も言いはしなかった。

「私は私のやりかたでやる。服部流に恥じない試合をしたいだけだ」

西隊長のお考えです！

「ご馳走様でした！」

「ご馳走でした!!」

「よし、全員片付けが終了次第会議室に集合！ 飲み物は各自で持つてくるように！」

「西隊長は何をお飲みになりますか！」

「お、気が利くじゃないか福田！ 私は緑茶だな。先輩方はお先に行つていてください

！ 我々が後片付けをいたします」

「じゃあ、よろしくねー」

3年生が去つていくのを確認すると西は誰にも見えないようにため息をついた。前任の「辻つっじ」から隊長職を引き受けて、すでに2か月が経っていた。最初こそ、辻の隊長引退の裏では何かしらの陰謀があるのではないかと疑っていた3年生たちであつたが、西の献身的な態度により今では疑っている者は一人もいない。

辻は今の知波単を自分では変えることができない、と悟り西に隊長を譲つたらしい。辻本人が一切話さないため、真意は不明だが西が隊長になつたことにより、無意味な呐喊は大幅に減つていた。

だが、3年生が在籍する状態で、しかも前任の隊長がいるというのに隊員を引つ張らなくてはいけないという状況は、思いのほか西に重くのしかかっていた。

常に緊張感をもって行動をする。それでいて、隊員とは良好な関係を保ち続ける。

思わずため息が出てしまうのも仕方あるまい、と自分に言い聞かせて西は日々を過ごしていた。

片付けが終わり、会議室に入る。西の姿を見ると、全員が口を閉じた。教室の前にある巨大な黒板には明日の試合会場の地図が貼ってあった。

誰かがやってくれたのだろう。西は、心の中でありがとうと呟いた。

「では、これより明日の試合の作戦会議を始める！ まず、何か意見のあるものはいないか！」

「やはり、呐喊がすべて！ 我々の魂は突貫のみ！」

「三島先輩。それだけは勘弁してください」

「なんだと！ 貴様は伝統を蔑ろにすると言うのか！」

「そういうわけではありませんが……」

「まずは西。お前の作戦を聞かせてくれ」

辻の綺麗な声が会議室に響く。

ヒートアップしかけていた熱気が瞬く間に冷めていく。

さすがは辻隊長だ。

「僭越ながら、私から今回の作戦の概要を説明させていただきます。まず、今回は森と起伏の多い会場となっています。このことから、主力であるチハ車の機動力を活かすのは少々難しいと考えます」

「ならば、どうする?」

「対戦校である大洗女子学園はかつて全国大会上位に入ったこともある強豪校です。なれど、今現在は素人の集団と化しており、所持戦車も残念ながら我々の戦車の足元にも及びません。今回は、そこを突きたいと考えます」

「具体的には?」

会議というよりは、辻と西の話し合いとなっていた。

しかし、その状況に異議を唱えるものは誰もいない。西の言っていることは至極正しく、辻の問いかけもまた当然のものだったからだ。

緊張で汗ばむ手を隠れて拭きながら、西は話を続けた。

「第一試合の最大車両数は10両。今回は、九五式軽戦車3両・九七式中戦車旧砲塔3両、新砲塔3両。そして……あの戦車を使います」

「あれは機動力はないぞ?」

「わかっております。そこで、九五式でまずは敵隊列を分断。その後、あらかじめ高所を

確保していた九五式新砲塔で砲撃を開始。応戦している敵戦車の背後を旧砲塔が突き、大混乱を起こしているところを例の戦車で殲滅します」

「……面白い。単純だが、単純だからこそ敵は裏を読もうとしてみともに身動きが取れなくなっているだろう。ならば、今回は時間とも勝負というわけか」

「はい。なので、戦車のスペシャリストであります先輩方に例の戦車の運用をお任せしたいのですが」

「任せておけ」

辻の言葉に続くように、3年生が思い思いに返事をする。

相手が聖グロリアーナ女学院や黒森峰ならば、このような作戦では一蹴されてしまうだろう。だが、まだ連携や練度の低い相手校だからこそ、こちらが選択できる戦術は幅広くある。それでいてこれほどシンプルな作戦にしたのは、複雑な作戦のあまり、思わず呐喊しようとする隊員を少なくするためだった。

辻も西のそのを読み賛同したのだろう。つくづく、完璧すぎて自分では追いつけないと若干ながら負い目を感じてしまいたくなる存在だ。

ゆえに、この先輩達とまだまだ戦いたい。この夏の一戦で終わりになどしたくない。どうせならば、優勝を目指したい。

「明日の朝は早い。各自、分担と仕事をしっかりと確認した後就寝せよ。明日は必ず

臨む者たちです!

絵音は送られてきた文面を眺め、思わずため息をついた。

送り主には「西住みほ」と書かれている。内容は、明日の大会では勝てないかもしれないが全力を尽くして、最後まで楽しもう、といった内容だ。

正直へどが出る。勝てない戦いに臨む者たちに価値はない。最初から負けを予測しているようでは、勝利の女神を捕まえることなど絶対にできない。

「だから、私はあの人たちとは合わない。最初からわかっていたさ。私の戦車道に対する気持ちは、憎しみしかない。認められない、望まれない憎しみ。名家の三女として生まれ、だが才能を持ってしまったが故に疎まれるこの思いをわかるはずがない」

「そうやって、ズツと勝手に引きずって思い込んで。いい加減やめようとは思わないの?」

「そちらこそ、勝手に部屋には入らないでくださいとお願ひしているはずですよ、マーさん」

「鍵が閉まってないから教えてあげようかと思つてね」

「……訳のわからないことを」

熊野は数少ない、絵音に起きた悲劇を知っている人物だ。

もともと、戦車道を離れ荒れていた絵音や社会に馴染めず浮いた存在となっていた三上や人を信用することを恐れていた由多を巻き込んで強襲戦車競技タンカスロンという新しい道を示したのは熊野だった。

彼女には敵わない。自分のことは何一つ口にしないくせに、自然と話したくなるような不思議な雰囲気をもとっている。

熊野の過去を知る者はいない。おかしな話だが、同じ学校に通っていないながらも、はたして彼女の名前が本当に「熊野」なのか疑問を持ちたくなるほど、何も知らなかった。「明日はしっかりと協力するんだよ?」

「……わかつてますよ」

「嘘。絵音、あなたに起きたことと戦車道への思いに彼女たちを巻き込まないであげて」
「わかつてますよ!」

怒声にも似た大声に熊野は口を閉じる。

関係ないことはわかつている。わかつていても、ふざけた態度で戦車道に挑む彼女たちにイライラするなどというのも、また無理な話だ。だったら、使えない隊長に頼るよりかは、自分の力だけを信じて試合を終わらせるほうがよっぽどいいのではないか?

大洗女子学園は試合に勝て、私はイライラする試合時間を短くできるのだから。

「やりますよ。しつかりやりますから、お願いします。一人にしてください。今は、私を放っておいてください!」

○●○○●○

ウツドデッキには白い机と椅子が並べられ、数人の生徒が机の上にあるお茶菓子をつまみながら紅茶を楽しんでいた。

そばに立っている赤毛の女子生徒には、やや気品と言われるものを感じることができないが、彼女たちの紅茶を飲んでいる姿だけで一枚の絵となるほど優雅たるものだ。

「アツサム、明日は確か大洗女子学園の試合でしたわね」

「ええ。相手は知波単学園。もつとも、一回戦から面白い試合になりそうですね」

「ダージリン様とアツサム様はどちらを応援しているのですか?」

「さて……それは自分で考えなさい、オレンジペコ」

答えをはぐらかすダージリンにオレンジペコは冷たい視線を向ける。

一年生にして、紅茶の名を受け継ぐことのできる精神と技術を持つ彼女であるが、時には我慢できないようなこともある。

「そういえば……確か、新しい生徒が大洗女子学園の戦車道に入ったようよ」

「へえ……名前とかはわかるのかしら?」

「当たり前よ。私はこれでも……」

「で、名前は？」

「ダージリン様。せっかくなのでアッサム様のお話も最後まで聞くべきでは……」

「アッサムがどこで何を学んでいるかなんて、いつも聞いているわ」

ダージリンの言葉に落ち込むかと思いきや、アッサムはそう言われることなど知っていたとでもいうかのように平然と資料をパソコンに呼び出していた。

つくづく、どういう関係なのか把握するのに苦労する先輩たちである。

オレンジペコの気苦労は絶えなかった。

「服部絵音、だそうよ」

「服部……まさか、服部流の？」

「そうね、三女よ。今は家を出ているらしいわ」

「そういうことね。ヘーヴィーズ学園の隊長さんが、妙にそわそわとしていたのは」

「今大会には出ないというのに……」

「あの……その服部流がどうかしたのですか？」

「あら、知らなかったのかしら？ ヘーヴィーズとグロリアーナは一種の同盟のようなものを結んでいて、そしてヘーヴィーズの隊長さんは服部流なのよ」

「はあ……それにどういう意味が？」

「気にすることはないわ。大洗女子学園がこの大会で勝ち進めば……という仮定の話を

「ただだから」

波乱の一回戦です！

第63回全国戦車道大会は、大きな問題もなく開催された。

大洗女子学園隊長のみもと知波単学園の西は挨拶を終えると、それぞれの陣営へと帰って行った。

中央の観客席には、巨大なモニターが設置されており、各校がどのような動きをしているかを観客達は逐一確認することができるようになっていた。

午前9時。試合開始の合図である空砲が打ちあがり、両校の戦車隊が一斉に行動を開始した。

「西隊長っ！」

「どうした細見」

「計画通りハ号二両は敵陣営への進軍を開始しております！ 計算によると、10分後には会敵する予定です」

「よし、わかった。戦闘は避け、あくまでも大洗女子学園戦車隊の分断に努めるように連絡しろ。なお、追撃するようであるならばポイントDへ急行するように。そろそろ例の戦車の準備ができるはずだ」

「かしこまりましたっ!」

西は後ろからついてくる車輛へと視線を向けた。

特徴的なのは前面の傾斜装甲。そして主砲の105mm砲はシャーマンはもちろんのこと、M26重戦車すら貫通する力を持っている。

見た目はヤークトティーガーに近いだろうか。

「まさか、敵もホリを持ってくるとは思っていないでしょうね」

「知波単学園の悲願である優勝のため……そして、先輩殿と一秒でも長く戦うためには全力をもって当たらなくてはいけない」

「それにしても、今年久しぶりに全国大会に出るような学校に対して警戒しすぎじゃないですか?」

砲手の発言に西は顔をしかめる。

それに気が付いたのか、砲手は気まずそうに俯くとそれ以上何も言わなかった。

どんな相手だろうとも全力でぶつかる。それが礼儀である。礼を重んじる戦車道ならば、なおさらのことだ。

西は特にその手のことに関しては厳格だった。

ゆえに、弱小だと誰もが評価する相手であろうと出し惜しみができない。

「大洗女子学園がどんな学校なのかなんて、正直わからない。だけど備えに越したこと

はないし、絶対に勝つためにはこれが一番だと思わないか？」

「……そうですね。すみません」

「良いんだ。さあ、そろそろ決戦の丘だ。チハ旧砲塔は下の茂みにて待機。新砲塔は、まだホリの護衛を続けるぞ」

「了解っ！」

○○●○○○

『西住、まずはどうする』

『まずは全車で固まって行動してください。想定以上に高低差のある土地です。どこから敵の偵察が来るかわかりません』

『了解っ！』

「はあ……」

「どうした？ 闇の瘴気にでも当たったか」

「そういうことになっておいてください」

絵音は由多への対応もそこそこに大きなため息をついた。

敵がどこから現れるかわからない？ 何を馬鹿なことを言っている。現れるとしたら、数百メートル先の盆地に決まっているし、西住はそれをよく理解しているはずだ。

さらに言うならば、試合前に見た知波単の中に軽戦車がいた。装甲が薄く、火力も大

してない日本軽戦車の行動など、陽動しかない。

「いや……もしかして……」

もしや、西住は既にすべてを承知のうえで茶番を演じようというのか？ わざわざ丘の上に展開するはずだった高火力戦車を別動隊として行動させず、共に行動させることで初めての实战で昂っているチームメイトを混乱させないように、という配慮でもしているのではないか？

だとしても、それは愚かな行為だ。

真の敵は眼前に迫る日本戦車であり、仲間の援護をしているだけでは勝つことはできない。

「やはり甘い。甘すぎる」

その時だった。前方の茂みから二台の八号が飛び出してきたのは。

『全車、発砲しないで下さい！ 大丈夫、向こうも攻撃は仕掛けてきません』

「そこまでわかっているならば何故……！」

みほの言葉通り、八号はそのまま踵を返すと丘へと続く道を爆走し始めた。

「……三上さん。追いますよ」

「いいのかよ！ 命令は出てないでい！」

「この車両の車長はっ！ 私です……！」

「……どうなっても知らねえでい！」

「由多さんも、いつでも撃てる用意を」

『あ、ちよつと、服部さん?!』

無線から聞こえてくるみほの声を絵音は黙殺する。

全体的に防御力に不安がある日本車両ならば、立ち回り次第ではテトラークの砲塔で十分抜くことができる。

仲良しこよしで戦うなどまつびらごめんだ。

「一回戦は私一人の力で勝つ。照準合わせ、確実に仕留めてください」

「誰に言っている！ 私スナイパーは狙撃手だっ！」

その言葉通り、由多は一撃で八号を撃破する。

もう一台の八号は慌てたように、蛇行運転をするも由多の腕ならば十分撃破できる。

「まずは二両……！」

「……！ やめろっ！ 避けるぞ！」

三上の言葉の直後。

轟音が響き渡り、テトラークのすぐそばで巨大な爆発が起きた。

チハからの砲撃ではない。

もつと強力な、それも重戦車級の攻撃だ。

「いったいどこからっ!」

絵音はキューポラから顔を出し、あたりを索敵する。

やがて、その正体を見つけると驚愕した。

テトラークだけでは決して倒すことはできない。こんな場所に一台で来ては、良い的になるだけだ。

私の判断が敗北を生んだ……?」

「ホリか……! そんな秘密兵器をつ!」

「私の判断で……また負ける……?」

「何を言ってるんでい! 早く伝えるんでい!」

「へ……?」

「これはチーム戦だ! 私たち一人で戦っているわけじゃない! 脅威がわかったのなら、すぐに伝えろ!」

「は……はいっ!」

絵音は慌てて無線機を手取る。

頭は真っ白だった。

普段は頼りないはずの三上と由多が、頼りがいのある尊敬すべき先輩に思える。

『服部さん! 今の音は……! ケガはありませんか!?』

「は……はい……敵の戦車は……」

絵音が言い終わる前に、テトラークはホリの砲撃を受けひっくり返ると白旗を上げた。

アナウンスが服部たちが撃破されたことを放送する。

「そ、そんな……私一人じゃ……何もできなかった……？」

チヨロチヨロ作戦です!

『やったぞ西! 不確定要素を撃破した』

「さすがです、先輩殿っ! 残りの大洗学園の戦力はすでに分析済みです。全車全周警戒厳に、IV号の奇襲に備え。力を合わせれば必ず勝てるぞっ!」

「おおっ!」

決して慢心しているわけではない。

大洗女子学園対サンダース大付属の練習試合の記録は何度も見た。どの車両がどのような働きをしているのか? 走行技術は? 砲撃精度は? チームの連携は?

どこぞのデータ主義者並みに分析をした結果を西は隊員達にあますことなく伝えていた。

しかし、一回戦のほんの数日前に大洗女子学園に合流したテトラークだけは、不確定要素として西の悩みの種となっていた。

その要素を序盤で撃破できたことは、最高の戦果と言えるだろう。

『西隊長、ホリの配置完了の報告を受けましたっ! 旧式砲塔チハも位置につきました』
「作戦通りいくぞっ! あとは待つだけだ」

『くう……待つだけというのは何とも辛いですな』

「そう言うな。これも作戦だ。一致団結してこの戦いを乗り越える」

○●○○●○

「服部さんは最後何を言い残したかったですか……?」

「そんなのわからないよ。もう、みぽりんの言うことをしつかりと聞いていればこんなことにはならなかったのに」

原則として撃破された味方からの通信は強制遮断され、聞くことができないようになっていた。

今回のような敵の秘密兵器の情報を、撃破され戦線を離脱したというのに共有する場合があるからだ。ただ、安全確認においては本部を介した通信を使うことで取ることが許されていた。もつとも、その時関係のないことを話したりすれば、一発で反則負けになるわけなのだが……。

無線機はひっきりなしに鳴っており、愚痴を言いながらも沙織が対応を続けていた。

隊列は保っているものの、試合慣れしていない大洗女子学園のメンバーに再び不測の事態が起きたとしたら、散り散りになり各個撃破されてしまうだろう。

なんとしても、この間に打開策を見出さなくてはいけない。

そもそも、あの砲撃音から察するに知波単学園は重戦車級の車両をこの試合に投入し

たのだろう。ただ大きいだけではない。破壊力もかなりあるはずだ。

日本戦車を運用する知波単学園が他国の戦車を使う可能性は限りなく低い。

提携している学校もいくつかあるらしいが、お堅い校風が取り柄でもあるのだから、そんなことはほしだいだろう。

では、第二次世界大戦終戦までの間に帝国軍が作り上げた戦車にはどのようなものがあつただろうか？

「……試作兵器？ アヒルさんチーム、お願いできますか？」

『なんでもおっしゃってください！』

「右に見える森の中を通過して、正面の丘の様子を見てきてください。おそらく、作戦会議では見なかつた戦車がいるはずですよ」

『偵察ですねっ！ わかりました！』

アヒルさんチームを偵察に出したのには、もちろん理由がある。全体を通して被弾率が低いからだけではなく、日本戦車独特のシルエツトであるならば、敵による発見がコンマ一秒でも遅れるのではないかと期待したので。

「西住殿」

「何かわかりましたか、優花里さん」

「チハの火力では軽戦車と言えども一撃で撃破できません。ましてや、乗っている人達

は強襲戦車競技で経験豊富な方々です。それでいて撃破されたとなると……考えられる戦車はおそらく二台だと思っんです」

「私もちょうど考えていました」

「一回戦は参加できる人数にも制限がありますし、これだけ高低差のあるフィールドとなるとそれなりに足回りもしっかりしている戦車じゃなくてはいけません。無駄な人員を省く……たとえば装填手の仕事を減らし、なおかつ完成度が高い試作兵器となる」と

「そうでしょうね。おそらくは……」

その時、ちょうど通信が入った。

素人にとって森の中を進軍するというのは極めて難しいものである。しかし、アヒルさんチームは高い個々の能力を生かしあつというまに偵察をこなしていた。

『見たことがない戦車がありました！』

「特徴を教えてください！」

『えーと……前のほうが丸くて……砲塔がないように見えますっ！』

「十分です。ありがとうございます。気を付けて戻ってきてくださいね」

『了解ですっ！』

みほは優花里と顔を見合わせる。

二人の予想は正しかった。最新鋭となる自動装填装置を唯一装備した純国産戦車。

「敵の秘密兵器がわかりました。これより作戦を変えます」

『どういう作戦になるんだっ!』

河島が絶叫する。

今ごろ、カメさんチームの車内では角谷と小山が困り顔で河島を宥めているのだらう。

そう考えると、クスツと笑えてきた。

「これから始めるのは、チョロチョロ作戦です!」

敵戒態勢です！

『どうする！ こちらの決戦兵器を見られたぞ！』

『もし報告が上がっているとしたら、大洗の奴らはホリの背後から来るかもしれないぞ！』

『ならば至急、茂みに隠れている旧砲塔も守備隊に加えたほうがいいんじゃないか！』

『それはだめだ！ 旧砲塔の攻撃でホリの射程内に敵フラッグ車を誘導する手筈だったじゃないか』

『ならばいったいどうするというのだ！』

「皆のもの、一度冷静になって欲しい。これは決してピンチではない。むしろ、我々は敵の貴重な戦力を削ぐことに成功しているのだからな」

西の一声で歓声上がる。

知波単学園の誰しもがホリを見られたということだけに意識が向かってしまい、一兩撃破という結果を見逃していたのだった。

しかしながら、早々に秘密兵器を見られたことに何のダメージもないかといえばそう

いうわけでもない。出来ることならば、なんの情報も無い状態で大洗女子を誘い出したかった。

だが、逆に言えばバレてしまった分、こちらはホリを隠すことなく使えるのだ。その強力な防御力をむぎむぎ無駄にすることなく、正面に立てて戦わせられる。大洗女子学園がどこまでの情報を掴んでいるかは未知数だが、吹っ切れてしまえばこれもまた一つの戦術となる。

「全車、作戦に変更なし。ただし、ホリは前進。旧砲塔との連携を密にせよ」

『了解……隊長！ 大洗女子です！ 大洗女子の車列が現れました！』

「なんだと……？ 数は！」

『IV号にM3リー、38tと八九式……え？ 全車います！』

「なんだとっ！」

『こちらチハ新砲塔攻撃を開始します』

「ああ、ちよつと……！」

西の静止をよそに新砲塔は発砲を開始。

素人ながら、一糸乱れぬ隊列を組んでいた大洗女子学園もこれにたまらず散開すると応戦を始めた。

最初に西が描いていた接敵とは大きくかけ離れた状態へとなっていた。余計な活を

入れたせいで、舞い上がってしまったのだろうか？

西は大きく深呼吸をすると諦めと決意を新たにす。

ここまで来てしまつては、ここで仕留めるしか方法はない。

「ホリも攻撃を開始！ 全車目標、敵フラッグ車IV号！」

『了解っ！』

後にインタビューで西は語つた。

あの時は聞く間もなく、そして伝令の言い忘れだろうと思つてしまった自分の判断が全ての敗因だと。

この時、静かに接近する脅威に知波単学園は気づいていなかった。

○ ○

「ウサギさん、大丈夫？」

『大丈夫です！ もう……逃げませんから！』

「無理はしないでください。まずは時間稼ぎです」

『了解！』

突然の発砲に僅かにパニック状態に陥つたものの、今は冷静に岩陰に隠れ各車が応戦していた。

予想通り知波単学園の秘密兵器はホリだったわけだが、その防御力ゆえの慢心なの

か、身を隠さずこちらに砲撃を続けていた。

しかし、それでよかった。むしろ、そうしてもらわなくてはみほの描いたプランにはなり得ないのだから。

「全車、チョロチョロ作戦開始してください!」

みほの言葉で全車一斉に岩陰から飛び出すと煙幕を吐き出しながら右へ左へと動き始める。

高所から狙っているとはいえ、煙の隙間が一切ない視界ゼロの状態ではどんなに砲撃しようともチョロチョロと動き回る大洗女子の車両を捉えることはできない。

「みほりん! これでもいいんだよね?」

「はい。茂みにおそらく増援部隊がいると思います。会長さん、お付き合い頂けますか?」

『了解、西住ちゃん。河島一、交代して』

『ええっ!? 会長が砲手ですか!?!』

こんな時だというのに、角谷の落ち着いた声を聞きみほは思わず笑みをこぼした。

それに釣られ、無線からも車内からも笑い声が漏れる。

そうだ。これは試合だとしても、一番大切なのは笑顔で勝つことなんだ。泣いて勝つても、そんなものは勝利じゃない。

IV号と38tは茂みへ強襲をかけた。

煙幕に巻き込まれながらも、指示を待たためジツとしていた旧砲塔を見つけると発砲を始める。

それほどまでで予想外だったことなのか。

旧砲塔は一切の抵抗を示せないまま、撃破されていった。

たまたま放った一発が38tをかすめたが、どうにか大破判定は出ていない。

ここまで5分とかかかっていない。この短時間で、数で有利にはなれていないが、大洗女子は3両の戦車を撃破していた。

「あとは……このまま時間を……」

みほは時計を見ると、仲間の奮闘を静かに祈った。

呐喊魂です！

「これが……西住みほの戦い」

回収車に牽引されている車内で、絵音はラジオ放送を聞きながら小さく呟いた。

みほがどのような作戦を実行しているのかは、今の段階では断定できない。それでも、4両に群がり攻撃を続ける知波単学園の様子を見れば、薄々ながら何をしようとしているのかをわかる気がしていた。

正確な観察眼と完璧なりサーチ能力。そして、適材適所を考える素早い判断能力。

なるほど。さすがは西住流。個々が一騎当千の武者となり戦う服部流とはそもそもが違う。

全員で掴む勝利か個人の活躍によってもぎ取る勝利か。みほはそれに柔軟性を取り入れることで、よりトリッキーでいて新しい戦術を生み出しているのだろう。

やろうとしていることは至極簡単だ。

しかし、今の知波単学園でそれに気が付くものはおそらくいない。

「珍しく驚いた顔をしてるな。何かあったんでい？」

「いや……何もありませんよ」

「隠し事はよくないな。私の第三の眼が絵音の言わんとしていることをハッキリと見せている」

先輩二人の顔を絵音は見る。

今までの人生に、見えない流派のしがらみに縛られてそれでも流派に見限られた自分に、誰とも関わりを持たうとせず自分だけの世界に閉じこもり外敵を避け続ける愚かさ、受け入れることを拒み続ける自分の忌み嫌っているはずなのに、居心地の良さのあまり気が付くとそこに浸りすぎていたのかもしれない。

まだ何もわからない。ただ、一個上の先輩で同じこれから戦車道仲間になっていくだけの存在にすぎない。

でも、だからこそ。まだわかっていないからこそ、これから心を通わせることができるとはならないか？ 西住みほとその仲間たちと経験したことのない何かを得られるのではないだろうか？ 楽しむことのできる戦車道を作り上げられるのではないか？ 体験したことのない未知を受け入れよう。

「私、決めました。大洗女子学園の戦車道に本気で打ち込みます」

○ ○ ○

『ええい！ 何時になったら煙が晴れるんだ！』

「むう……大洗女子学園はどれだけの煙幕を持ってきているんだ……」

西は唸る。

かれこれ5分以上、目の前に煙幕が広がったままだ。

丘の下に待機していたチハ旧砲塔が討ち取られてからもそれなりの時間が経っている。あの煙の中へ偵察を出すわけにもいかず、どういう状況なのかが一切わからないままであった。

丘の高所を取り、下には大洗女子の4両が必ずいる。おまけに、後ろには森が広がっているため大洗女子は退却するにしてもそれなりの犠牲を覚悟しなくてはいけないはずだ。

地の利は確実に知波単学園が握っている。だが、最後の一手を攻めきれない。

西は両の拳を握りしめ歯ぎしりをする。さすがは西住流。そう簡単に決着は付かせてもらえないようだ。

『ええい、めんどくさい!』

「落ち着け玉田! 焦ってもいい結果は生まれないぞ」

『しかし隊長! こちらはひたすら撃ち続けているんです。このままでは弾薬が切れてしまいます!』

「それもそうだが……」

『隊長、ここはフラッグ車であるホリを残し我々で呐喊を仕掛けましょう』

「ダメだ、そう早まるな！」

『いいな、そうだ。そうしよう！』

『さすがは3年生がたの先輩である！ 根性が違う！』

『よし、呐喊！』

「待てっ！」

誰が下したのかもわからない命令によって、残りのチハ新砲塔が一斉に煙の中へと呐喊を始める。

西は少し考えるも、仕方なく仲間につき呐喊を敢行した。

ホリの装甲は正面だけでも200m近くあるのである。たとえチハ隊の呐喊をすり抜けようとも、丘を上がっている間にホリの砲撃の餌食になるのは必死だろうし、何よりも生半可な攻撃ではホリを撃破するなどまず不可能なはずだ。

丘を下りながら西は深呼吸をする。

覗き窓からは、先ほどよりも激しい砲撃合戦が繰り広げられているのがわかる。

「待てよ……」

下りきつたあとに西は息をのむ。

大洗女子学園の中で唯一、ホリの装甲を抜ける戦車があつたことに気が付いたのだ。むろん、それをもってしても正面からやりあうことは不可能なはずだ。しかしながら、

側面や背後から攻撃を仕掛けたのなら……。

「IV号、M3リー、38t、八九式……III突はどこへ行つた……う！」

騙された！ 私としたことが何たる不覚。目の前にフラッグ車がこのこと現れ、予想外の煙幕攻撃を受けたことですっかり冷静に考えることを忘れてしまっていた。

「全車戻れ！ フラッグ車が……」

西が言い終える前に、無慈悲な放送が試合会場に流れ始めていた。

○ ○ ○

「行けよ！」

「トロイの木馬だ！」

「それは違うだろ……」

なんやかんや言いながらIII号突撃砲が急発進を始める。

絵音が撃破され、急な作戦変更を言い渡されてから、ズツと身を潜め続けていた。丘であるならば、何も斜面は片側にしかないわけではない。

みほたちが煙幕を張り、片側に引き付けている間にIII突が反対側から頂上へ向かい、林の中で偽装し待機していた。

あとは知波単学園名物呐喊魂が出るのを待つだけである。完全に護衛がいなくなつたホリならば、容易に背後に付くことができるであろう。

ホリに砲塔が無いことも、この作戦の重要なポイントだ。

「背中が見えたぞ！」

「よし、ゼロ距離まで近付いて攻撃する！」

ホリが慌てたように方向を変えようと動き始める。

しかし、もう遅い。

今更気が付いたところで、撃破されるという結果を変えられるわけがないのだから。

「撃てっ！」

Ⅲ突の75mm砲がゼロ距離で炸裂する。

背面を撃たれたホリは煙を上げると、勢いよく白旗をあげたのだった。

笑顔…?なのです!

「もう、そんなことないってー。服部さんも、私たちと一緒に戦車道をやってくれるって
言ってたじゃん」

「だけどさ……」

「もう、梓は気にし過ぎなんだよー。そう思うよね、桂里奈ちゃんも」

「あいつー!」

「あやはどう思う?」

「そうだねー。でも、昨日は打ち上げにまで参加してくれたんだよ? 服部さんも私た

ちともう、一蓮托生……? だっけ、そんな感じじゃないのかなー?」

「……そうか!」

突然大声を出す澤にウサギさんチームの面々がビクリと肩を震わせる。そんな様子にはまったく気づいていないまま、澤は上機嫌のまま下駄箱へと入っていく。今にでも鼻歌でも歌いそうな様子の彼女にメンバーは、どう声をかけるべきかと迷い続けた。

「上機嫌……」

「紗希にはわかっちゃうー? わかるよね?」

「本当に珍しくテンション高いね。何か良い事でも思いついたの？」

「もちろん！ 私たちは服部さんと同じ一年生なんだよ！ だから、私たちがみんなと服部さんが打ち解けることができるようにするべきだと思うの！」

「そ、そうかな……？」

「そうだよ！ そもそも同い年なのにさん付けって変じゃない？ よし、今日からは絵音ちゃんって呼ぼうかな。そうと決まれば！」

「あ、粹！」

澤は意気揚々と階段を駆け上がっていく。

目指す一年生の教室は4階。普段ならば、階段の段数が多いと皆で文句を言いながらゆっくりと上っているが、今日は違った。その足取りは軽い。思いつたことを今すぐにも実行に移したい。しかもそれが、みほのために繋がるかもしれないならば、なおさらだ。

絵音はいつも通り、教室の一番後ろの席で読書をしていた。ブックカバーをつけているため、いったいどんな本を読んでいるかはわからない。

「戦車道の本を読んでいるのかな……？」

疑問を口にしながら絵音へと近づいていく。

彼女はまだ気が付いていない。馴れ馴れしいと思われてひかれるかな？ 構うもの

か。

「絵音ちゃん、おはよ……」

「ひいっ!」

とつさに絵音が開いていた本を机の中に隠す。

あまにり挙動不審な行動に違和感を覚えるも澤は追及しないことにした。そんなことよりも今、絵音を名前前で呼ぶことができた自分の勇気を称えていた。

「……はよ」

「え……?」

「お、おはよ……」

「ひいっ!」

絵音の顔を見て、澤は思わず腰を抜かす。

それは彼女なりの精一杯の笑顔なのだろう。そうだとしても、表現のできない効果音が付きそうなニタリとした顔は、とてもじゃないが笑顔には見えない。ぎこちなく口角が上がり、目は笑っているというよりは、今にでも泣き出しそうな様子を見せている。

笑いながら泣いている、しかも見方によっては怒っているようにも見えなくもない。

間抜けな声をあげた澤は、恥ずかしさを押し殺しながら、素知らぬ顔で自分の席へ戻るしかなかった。



「で……？ わざわざ呼び出してまでしたかった話っていうのはそれなの？」

「その言い方はひどくないですか？ 大問題ですよ！ 大問題！ せっかく話しかけてくださったのに……」

「にしても……絵音はもう少し堂々として良いとおもうけどね」

三上が机の上にある本を眺めながらため息ながらにつぶやく。

放課後、緊急招集をかけられた熊野と三上は渋々ながらも、絵音以外の誰もいなくなっている一年生の教室へと足を運んでいた。

由多は用事があるらしく、招集には応じなかったが、絵音としては彼女がいてはややくこしくなる未来しか想像できないため、都合がよかった。

「高校生にもなつて恋愛小説読んでいたことをバレたくなくて、変な声あげて驚くやつがいるとはわね……」

「あかんね。うん、あかんよ。絵音。別に何を読んでいてもいいじゃないか」

「それはわかっていますよ！ ですが……その……私なんか、恋愛小説読んでるなんて思われたら……なんていうか……」

「はあ……何言ってるんでい！ 大洗女子学園戦車道に骨を埋める覚悟ができたんだろ!? だったらありのままの自分をさらけ出さないでどうするんでい！」

「た、確かに……」

「三上はまともな思考回路の持ち主だからね。話し方に難があるけど」

熊野の突っ込みをスルーしながら、三上がもう一度ため息をつく。

下校時間までもまもなくとなっていた。

いつまでもシヨゲている絵音に付き合っているのは、いつ来るかわからない見回りの先生になんとどやされるかわかりもしない。

だが、熊野にも三上にも絵音の気持ちが変わらなくもなかった。

社会に学校にクラスに馴染めず、爪弾きにされた彼女たちだからこそ、共に手を取り合い戦車に乗ってきた。初めて友達を作る機会だったかもしれないのに、それを失ったことに対するシヨックは計り知れないだろう。

「まあ、そうだな。明日もう一度話しかけてみなよ。昨日はびつくりとしたとか何とか適当に理由をつけられればいいだけだから」

「はい……頑張ります……」

とぼとぼと教室を出ていく絵音の背中を見ながら、今度は熊野がため息をついた。

「マーさん。絵音は本当に戦車以外はダメダメだな。普段は強気なくせに、こういう時は……」

「そう言っただけだな。それを支えてあげるのも、私たちの役割だろ?」

各校も注目です！

学園艦のいたるところから景気の良い声が飛び交っていた。なるほど、確かに国風をそのまま受け継いだけあり、良い意味でうるささがある。学園艦としての規模もそれなりに大きい。他校のものよりも1.5倍はあるのではないだろうか？ それを運用し、しかも、文武ともに惜しみなく財力を注ぎ込んでいるというのだから恐ろしい限りである。

メインストリートを抜け、幾分か静かさが漂うその一帯がサンダース学園戦車道の練習場となっているのは、サンダース学園の生徒だけではなく、多くの学園艦関係者が知っていた。

今日はその中に、若干異質な存在の者たちがいた。

貴婦人たるは何かをわきまえた、落ち着いた物腰に柔らかなしやべり方。やや、得意げに格言を話すことがあるのが玉に瑕きずではあるが、その程度のもは些末な問題でしかない。

迷彩色の野営テントの中には、真っ白いテーブルと椅子というなんとも風情もへったくれもないものが鎮座している。

「それで……ケイさんはどうお考えで?」

「そうね。まあ、面白いとは思うわよ?」

紅茶をすすりながらサンダース学園戦車道隊長ケイが答える。

普段紅茶を飲まない彼女だが、せっかく出されたものなのだ、わざわざ残すなどもつたいたいと思っていた。本当のところ紅茶よりもコーヒー派なのだが、今言うのも無粋なだけであるし余計なことを口にしないほうが身のためだろう。

「西住流の加入はそれだけ大きいということがよくわかったわ」

「西住流だけが……はたして大洗女子学園の勝利の要因なのでしょうかね?」

「……ダーズリン。わざわざここまで来たのだから、周りくどい言い方をせずに素直に話してもらいたいわね」

ケイの目が鋭いものへとなる。さすがのダーズリンも一瞬たじろいでしまうほどの殺気がそこには籠っていた。

ただいつも陽気に振る舞うだけならば誰にでもできる。時には、相手を呑み込んでしまうほどの気迫がなければ在籍数100名を超えるサンダース学園戦車道の隊長など務まらないのだろう。

「服部流をどう存じてして?」

「確か……今は干されている流派では?」

「ええ。あの事件がきっかけで服部流は干され、細々と続けていくしかありませんでした。しかし、今もその門下生を着々と増やしている。そして……」

「まさか、服部流の門下生も大洗女子学園に？」

「それは想像してくださいな」

「Great! 最高に面白くなってきたじゃない」

ケイの喜ぶ姿を見ながら、ダージリンはほくそ笑む。

予定通り。ケイならば乗ってくれると信じていた。

聖グロリアーナにとって今大会大きな壁は3つある。

一つは9連覇を成し遂げている黒森峰女学院。しぶとく勝ち続けるプラウダ高校。

そして、物量にものを言わせるサンダース学園。

黒森峰とプラウダは幸か不幸か同じブロックにいたため、互いに潰し合うのを待てば

よかった。

ならば今は、サンダース学園の情報を少しでもかき集めるのが最優先ではないか？

もしも今年から導入する新兵器があるのならばデータが欲しい。光る原石があるのなら、

早めに対策を練っておきたい。

どのみち、準決勝戦まで勝ち上がったとして対戦校となるのは間違いなくサンダース

学園だろう。

「私も、そろそろ優勝したいですからね」

ダージリンの独り言を聞いている者はいない。

ケイは礼を言うのとテントを飛び出し、どこかへ去っていつってしまった。

「ダージリン様。これは計画通りなのですか?」

「もちろんよ、ペコ。私も隊長。チームがいかに勝てるか模索するのが仕事ですよ」

「はあ……?」

「ズルい、などと思いませんか?」

「そうですね。確実にその様に言う方がいらつしやるでしょうね」

「ふふふ、可愛いですわね。もう戦いは始まっているだけのことよ。ペコにもそのうち

わかるわ。私が大洗女子学園の情報を与えた意味が」

新戦力です！

「会長ー、どうしてこんな山奥に行くんですかー」

「河島ー、そう弱音を吐くな。この先には、なんでも、彼女たちのラボがあるらしいぞ」
「ちゃんと学校の許可を取っているんですかね？」

「ないっ！」

「ええ!? そんなの認められないっ！ 今すぐ取り壊しましょう」

「そう怒るな。彼女たちの機嫌を損ねてもいいのか？」

「それもそうですが……」

「ともかく、一度行ってみるしかないようですね。桃ちゃんも、いいよね」

「桃ちゃんと言うなっ！」

いつの日か、あんこうチームがIV号戦車を見つけた山を生徒会の面々は登っていた。早朝に叩き起こされ、目的も告げられずに山登りをして文句を言わないあたり、良い意味で角谷に調教されている河島と小山が疲労の色を見せ始めた時、ラボが段々と見えってきた。

ラボと言っても、非公認のものであるため、洞窟を利用した非常にひっそりとした物

だ。

「熊野ー、来たぞー!」

角谷が入り口で叫ぶ。

ややあつて、大柄の熊野が姿を現した。ニコニコと笑みを浮かべ、生徒会を招き入れる。

洞窟の中は意外にも、それほど冷え込んではいなかった。ところどころにある空調設備を見ると、それなりの大金をはたいて大改造をしたのだろう。

しばらく進むと、開けた場所へと一行は出た。そこには、見覚えのあるテトラークと初めて見る戦車が静かに動く時を待っていた。

「おはようございます、生徒会の皆さん」

「おー、おはよう、服部ちゃん。それで呼び出した件だけでも……」

「はい、これがそうなります」

「ほほー」

テトラークの1.5倍ほどの大きさの戦車を絵音は指差す。

見た目はどこか、あの強豪校の一つであるサンダース学園の主力洗車M4シャーマンに似てはいるが、まったくの別物なのだろう。

カラーリングも今はなぜか、モスグリーンであるため、余計にそう見えるだけかもし

れない。いわゆる、認識の錯覚だ。

「なるほど……お前たちの新しい車両か」

「そういうことだ。ふっ……私の狙撃能力を遺憾なく発揮できる代物……」

「まだ、練習していないし、そもそも、こいつが走るかはわからない。だが、きつと力になるでい！」

「おい三上！ 私の口上を邪魔するなど何度言ったら……」

「兎にも角にも、まずは、角谷。あんたの力で、この子を整備してほしいんだ」

「マーさんまで……」

角谷はニヤリと笑うと、謎の車両に近づき再びゆっくりと眺めた。短い砲塔だが、今の大洗では大きな力となるだろう。資金が集まれば、そのうち長身砲へ変えたいものだ。

「大丈夫だ。自動車部にも事情を伝えてある。30分もすれば、取りに来るだろうよ」

「さすがだ、助かる」

「西住にはもう言っているのか？」

「まだです。しっかりと整備が終わってから言おうかと。なんとか、二回戦のサンダー入学園戦に間に合えばいいのですけど……」

「お？ 服部ちゃん。随分とやる気が出てきたね」

角谷がからかうように言うと、絵音は自分の言った内容に気が付いたらしく、サツと熊野の後ろへと隠れた。熊野も、隠れなくてもいいのに、などと言いながら苦笑いをしている。

「どうせやるなら……勝ちたいですから……私も……力になります……」

絵音は小声でそう呟いた。

ここが洞窟の広間などという、音が反響しない場所であつたら、誰も聞こえないような声だった。

視察なのです！

二回戦の対戦校がサンダース大付属高校だと判明した二日後、次の試合会場が鬱蒼とした密林であることが知らされた。

みほと優花里、そしてマーさんこと熊野と絵音は一足先に試合会場の下見へ来ていた。

密林特有の水分を多く含んだ地面。生い茂る木々を抜けた先には、開けた丘が広がっていた。ただの密林ではなく、併設して丘陵地帯があることを先に把握できたのは良かった。

知波単学園戦で嫌というほど思い知ることとなった、先に高所を取られることは何としても避けなくてはならない。

「だけど、そう簡単にはいかないだろうね」

「そうでありますね。先に高所を取ろうと躍起になるのは、サンダースも同じことでもありますし」

「まずは、この密林をどう抜けるかを考えるべきかな？」

「そうは言われなくても、密林内での砲撃戦はかなり難易度の高いものであります。密

林に入る前にサンダースの本隊を叩くのが、最もベストなのではないでしょうか？」

「確かに、言われてみれば……」

マーさんと優花里の会話を聞きながらも、みほと絵音はジツと眼下に広がる景色を見つめていた。彼女たちが今、問題となつている丘の頂上に立つていた。想像していたよりも見晴らしはよく、一部木々が薄い場所への砲撃も可能なように思えた。

「密林に入る前に叩くとしても、サンダースのシャーマン部隊を今の太洗女子で相手するのは分が悪すぎます。かといって、練度の高い彼女たちを密林で迎え撃つわけにもいきません。丘陵地帯で戦うなどもつてのほかです。この状況、隊長ならどうしますか？」

「うーん……。やっぱり、一番良いのは先にこの丘を取るのだよね」

「そうですね。機動力だけを比べるならば、まだ五分で戦えるかもしれませんからね」

「それに私たちの戦車は小さい物が多い分、小回りが利きます。まずは密林を走行する訓練をするほうがいいのかもしれない」

「わかりました」

みほと絵音の会話を邪魔することがないように、マーさんが優花里に小さく囁く。

「なんだかんだ言つて、あの二人は良い感じね」

「当たり前であります。二人とも、根っからの戦車好きでありますから」

「ふふ、楽しくないとやってられないものね……」

遠い目をするマーさんに優花里は不思議そうな視線を送る。

しかし、優花里が追及することはなかった。知り合つてまだ僅かだが、熊野という人物も何か人には言うことのできない闇を抱えている気がしたからだ。

かつて自分が、趣味が合わないということだけを理由に虐げられてきたように、彼女にも混沌とした過去があるのだろう。

みほと絵音はやがて、地図を取り出しあれやこれやと議論を交わしながら、書き込みを始めていた。まだ、当分終わることはないだろう。優花里はそんな姿を誇らしく、微笑ましく眺めながら、リュックサックから温かいコーヒーの入った水筒を取り出すと紙コップへと注ぎ始めた。

○ ○ ○

大洗女子学園自動車部の部室では、オイル塗まみれに彼女たちが戦車の整備を進めていた。今整備しているのは二台だ。深い緑色の車両とIV号戦車。

IV号戦車の砲身はI回戦の時とは変わり、長身砲へと変えられていた。これにより火力・射程が大幅にパワーアップし、支援戦車から主力戦車へと立ち回りを大きく変えることができた。シャーマン軍団を相手にするには、必要な改良だろう。

対して、深い緑色の戦車の方のオーダーは少々変わっていた。

「まさか、初めて持つてくる戦車のこんな場所を弄ることになるなんてね」

「砲手用の車載窓を用意してくれて。ふふ……溶接とかしちやつていいのかなー?」

「失敗したらしたで、元からこうでしたって言えばいいよ」

不穏な内容を話しながらも、自動車部の面々の表情は明るい。戦車道大会が始まったことで今まで以上に無理難題を言われる可能性があるが、それすら自動車部は楽しみみとして捉えていた。

自動車バカ、戦車バカと呼ばれる日もそう遠くはないだろう。

「これ、なんて言ったっけ?」

「ナウエルDL43だよ。これまたマニアックな戦車だよ。大戦中に作られたけど、そんなに多くは作られなかったみたいだし」

「マニアックだと整備のためのマニユアル見つけるのも大変だよ」

「これ以上増えないといいんだけどね」

「いや、増えるでしょ。うん、絶対増える。そんな勘がする」

「やめてよ……ただでさえ勘がいいのに、こんなところで発揮しないで」

彼女たちはまだ知る由もなかった。

自分たちがまさか、戦車に乗ることになるなどと。それも、試合中の走行中に整備するなどという荒業に出たため、月間戦車道で取り上げられプチ有名人になることを。

真新しく塗装されたナウエルが鈍く光る。二回戦まで残り一週間を切っていた。大洗女子の縁の下の力持ちの奮戦も、誰に知られることなく続くのであった。

二回戦の始まりです！

鉛色の雲が垂れ下がる、どんよりとした空。

灰色とも黒色とも取れる雨雲が空いっぱいになり、太陽の恵みが入ってくることはなかった。まだ午前10時だというのに、いつ雨が降ってもおかしくはない。

「おいしいです！ さすがはサンダース！ 試合をするのにシャワー車からキッチンカーまで総出で来るんですね！」

「Of course! 戦車道の試合は大イベントよ」

「そうね。サンダースはこういうところでは生き金を使うのよ」

ガムを膨らましながら答えたのは、ナオミと呼ばれるサンダースの生徒だった。優花里は彼女の名前を聞いてすぐにピンと来たらしく、どうやら1000m以上距離があったとしても確実に急所に撃ち込んでくる優れた狙撃手らしい。その隣でソワソワしているのはアリサだった。アリサの落ち着きのなさに、サンダースの隊長であるケイが落ち着きなさいよ、などと言い眉をひそめている。アリサは何か反論しようとしていたが、ケイの顔を見ると諦めたようだ。

まあ、試合前に敵と慣れ慣れしくするのを良いと思わない者もいるだろうな。

絵音はアリスに同情しながらも、もらったフランクフルトを綺麗に平らげた。これに下剤など入っていたら笑い話にもならないが、フェアプレーを望むケイに限ってそんなことはしないだろう。

「ありがとうございます。あの、そろそろ時間なので……」

「ん？ そうね。じゃあね、みほ。お互い、いい勝負をしましょう」

「はいっ！」

大洗女子の面々は一礼すると、その場を後にした。残されたケイ達は、一人の生徒の背中を陰しい顔で見続けた。事前にある程度の情報を握っていたとはいえ、調べれば調べる程、出来ることなら勝負を避けたいと思わせる相手だった。

「どう思った？ ナオミは」

「見た目は普通の生徒だろうね。仮に中学の頃にあの騒動を起こした、と言われても信じることはできない」

「そうね。小さな背中で、学校一つ潰しかけるような事したとは思えないわね」

「ケイ。わざわざそれを知るために、大洗女子を呼んだの？ そういうのやめましようよ。何ていうか、こちらの手もバレそうよ」

「いいじゃない。彼女たちが私達が何を使うかを見破るのなら、それは彼女達の功績よ？ さあ、行くわよ！」

○○○

空高く赤い信号団が打ちあがる。

『試合開始!』

場内アナウンスと共に観客が一斉に沸き上がった。大洗女子学園サイドの応援席では、知波単学園がフレーフレー大洗! などと掛け声を大声で発し応援していた。その様子にさすがの絵音も苦笑すると、ナウエルの中に乗り込んだ。ナウエルを動かすために、普段は外で観戦しているマーさんが通信手として乗り込んでいた。戦車に乗るのは久しぶりだろうが、その落ち着いた態度を見ると、長年戦車に乗り続けている玄人ではないか? と勘違いしてしまいそうになる。

大洗女子学園ではナウエルことライオンさんチームの加入とあんこうチームのIV号の砲塔を短砲身から長砲身へ変えたことにより、戦力の底上げをすることに成功していた。それでもまだ、シャーマン軍団率いるサンダースの足元にも及ばない。あとは、戦術でカバーするしかなかった。

「それで、西住隊長。どうすればいい?」

『とにかく密林を抜けた先にある丘陵地帯を目指します。単純な作戦ですが、幸いにもスタート地点から丘陵地帯までは私達の方が近いです。高性能のシャーマン部隊だとしても追いつくことはできません』

「わかった」

「なんのひねりもないけれど、初めてこういうぬかるんだ場所に来る子もいるだろうしね。無理に捻って連携を乱すくらいなら、一点突破したほうがいいのかもしれない」

「そうですね。このまま前進してください。私達が先遣隊となります」

「あいよっ!」

ナウエルが加速する。一回戦の時とは違い、その様子を誰かが咎めることはしなかった。あんこうチームとライオンチームしか戦車道道に精通していない以上、敵の様子を探る先遣隊になるのはどちらかのチームしかありえなかった。さらに、あんこうチームは隊長車であることも踏まえると、自ずと先遣隊になるのはライオンチームのほうだった。それに対して異論はない。最も妥当な策であることは、絵音も理解していた。

不規則に並ぶ密林特有の木々を速度を落とさずに駆け抜けていく。車体が全体的に大きくなったというのに、そのドライビングテクニクに一切衰えを感じさせないところが、三上が天性の才能の持ち主であることを示していた。

絵音はキューポラから顔を出して索敵をした。視界は相変わらず悪いが、まったく見えないというわけではない。絵音はソツと耳を澄ました。大洗女子学園以外のエンジン音を聞き分けることなど、彼女にとつて朝飯前だ。異音を感じたのは数秒後のことだった。

「何かがこちらに急速に近づいてくる」

初めて聞くエンジン音に絵音は困惑した。

距離はグングンと縮んでいく、近づいてくる何かが時速50km以上出していることはすぐにわかった。わからないのはその正体だ。シャーマンとはいえ、中戦車の大きさで密林を高速移動することはできないはずだ。ならば……もつと車体の小さい何かが……。

最初にその姿を目にしたのは、砲手である由多だった。

「ミニサイズのシャーマンが近づいてくるぞ」

「ミニサイズ……? まさか……」

絵音は迎撃態勢を指示すると、みほへの通信を開いた。

イナゴ軍団襲来

時間は少し巻き戻り、試合開始前のサンダース学園開始地点。

ケイはシークレット枠で参戦させる4台のM22軽戦車ローカストを腕を組みながら見つめていた。

空挺戦車として開発され、増加生産の分を含めると2000台近く製造された戦車だが、肝心の「奇襲性」において評価されることはなかった。理由としては、輸送中は砲塔を外す必要があり、降下後に地表で組み立て作業を行わなければいけなかったかららしい。もともと、戦車としては大変優秀な性能を誇っており、イギリスにも輸出されたほどだった。後継機として開発されたM24は、あの大学選抜チームでも採用しているチャーフイーだ。

「ケイがローカストを持ってくるなんてね」

「悪い作戦じゃないでしょ？ 密林ならシャーマンよりも小回りの利く子が必要だったし、なにより……」

「なにより？」

途中で言葉を切ったケイをアリサは不思議そうに見る。

心なしかケイの目はまるで、これから悪戯でもしようとする幼い子供のようキラキラと輝いていた。

アリサはこういう目をした彼女は、何か悪さを企んでいることを知っていた。知っているからこそ、この試合をケイが心の底から楽しめると期待していることもわかった。

「楽しみじゃない。西住流だけじゃなくて、服部流まで入ったチームと対戦するなんて」「楽しむのでもいいけど、足元をすくわれるようなことは無しでお願いしますよ……」

「Of course!! 当然よ。試合に勝って、なおかつ楽しむ。それを目指すのが戦車道よ。だからね、アリサ」

ケイの視線が鋭いものへと変わる。一瞬逃げ遅れたアリサは、その視線に捕まり身動きが取れなくなっていた。心の底でアリサは静かに、神よ助けたまえ。タカシ助けてと叫ぶ。

「余計なことはしちやダメよ? いい、私はフェアプレーをモットーにしてるんだから」

「は、はいっ!」

「だったらシークレット枠じゃなくて、堂々と名前まで公開するべきじゃなかったのか?」

ガムを噛みながらやってきたのはナオミだった。

ナオミの言う通りだ。記憶にある限り、ケイがシークレット枠として戦車の名前を隠

すことなどおそらく初めてのことだ。いつもなら、お互いに名前のない戦車で戦っても面白くないでしょう？ などと言い、決して隠したりはしない。

フェアプレーと言いなながらも、相手に隠し事をする。なるほど、確かにケイの言っていることは矛盾しているのかもしれない。

ナオミの言葉にケイはニツと笑う。

「それは違うわ。フェアプレーというのは、重箱の隅をつつくようなルール違反スレスレの行為やルール違反をすることだわ。シークレット枠を使ったのは、一種のサプライズと同じよ。はたして、有名な流派同士が手を組んだ時、どのような戦いをして、どのような情報分析をするのか……とつても楽しみじゃない？」

「ふっ、まったく、そんな目をしたケイには何を言っても仕方がないし、私もシークレット枠の使用に反対はしない」

「ふふ、よくわかってるじゃない。そろそろ時間ね。全員乗車よ！ さあ、楽しんでいくわよー！」

『Yes, mam!!』

最後の方の言葉は無線機のスイッチを入れて話したため、仲間たちから返事が来た。

「ローカスト部隊は少しでも早く密林地帯に行きなさい。おそらくだけど、大洗も斥候部隊を出しているはずだわ。かき乱して、大洗本隊の居場所も丸裸にしなさい。アリサ

は別働隊を率いて、丘陵地帯を陣取つて。ナオミもそれに追従。狙撃ポイントを確保よ。さあ、行くわよ！ Go ahead！」

誤算

「マーさん。西住隊長には連絡を入れましたか？」

「今、入れてるところだよ。あ、西住ちゃん？　接敵したよ。小さいシャーマン軍団がいる」

『小さいシャーマン軍団？』

「マーさん、ちゃんと伝えて」

「はいはい。ローカストを三両確認」

『ローカスト!?　この目で見てみたかったです……』

今聞こえてきた声はIV号で装填手をつとめている優花里だろう。さすがは戦車オタク。こんな時でも、名前を聞いて興奮するだなんて。

そんな純粹さをどこか羨ましく思いながらも、絵音は現状を整理する。

ナウエルの砲ならば、十分ローカストを相手に戦うことはできる。問題があるとすれば、数の差とこの地形だろう。鬱蒼としたこの地形での機動戦では、どうしても数が多い方が有利となってしまう。

『とりあえず、ライオンさんチームは一度退いて……』

「大丈夫ですよ、西住隊長。私たちが、どうかきましょう」

『え…………?』

困惑の声が返ってくる。予想通りだ。

絵音には確固たる自信があった。自分ならば、自分たちならばこのローカストを相手に有利に立振る舞うことができるという自信が。

「任せてください。それよりもおそらく別働部隊が丘陵地帯の確保、さらには大洗本隊へ強襲をかけるものと思います。西住隊長はそちらの方を」

『…………大丈夫なんだよね、絵音ちゃん』

「もちろんです」

『…………わかったよ。頑張つてね』

数秒の間の後返ってきたみほの言葉を聞き、絵音は無言でうなづく。

言葉など不要だ。関係こそ浅いが、お互いに戦車道の名家として生まれた一種のテレパシーのようなものがある。むしろ、余計な言葉を返した方がみほを不安にしまうだろう。

「さて、と…………これから忙しくなりますよ」

「ふん! いつものことかい!」

「右腕がうづく。なるほど…………力を見せる時が来たということか」

「ま、いつも通りやってよ。私は邪魔しないようにするからさ」

4人の顔に凶悪な笑みが浮かび上がる。間違いなく、それは悪魔と同等の凶悪さ、ひいてはそれ以上の禍々しさを含んでいる。

サンダース学園のケイの考えは正しい。シークレット枠で普段は使用しない小型戦車を使うことでインパクトを与えるだけでなく、確かな実用性で強襲を仕掛ける。

大戦末期に開発されたローカストであるからこそ、できることは多い。

だがしかし、ただ一つ、ケイはミスを犯している。否、自身の予想に含めていないことがあった。

もしかしたら事前情報として知らなかっただけかもしれないが、そうであるならば自校の情報収集能力の低さに泣くしかないだろう。

小型戦車同士の戦い、ましてや普段乗っているテトラークよりも数段強化されているナウエルに乗っている彼女たちにとって、この状況は最高の舞台だった。

強襲戦車競技タンカスロンで培った技術が彼女たちにはある。ローカストを相手にするのは初めてだが、基本は何ひとつ変わりはないはずだ。

「さて……では始めますよ。手始めに一発撃ち込みましょうか」

「任せろ」

「三時の方向の大木に。あれだけ腐っているのです、容易に倒れます」

「は、い、よ」

ナウエルの75mm砲が火を噴く。

絵音はいつもより大きい爆発音と振動に思わず、体を震わせる。

砲弾は腐りかけていた大木に命中すると、大木は音を立って倒れ始めた。そちらの方
向へ勢いよく向かっていたローカストは緊急回避を試みるも、そのまま大木の下敷きと
なり白旗を上げた。

突然の攻撃にほかのローカストも戦闘態勢に入る。

「残り2両」

高揚感がたまらない。

ローカストの運転は慣れていないのか、どこか覚束おぼつかなさがある。弱者をいたぶって興
奮するような趣味はないが、これは戦車道。有利な立場であり続けることに興奮を覚え
る変態であることくらい、許してほしい。

「残りも狩り取ります！」

一騎当千です！

「なんだこれは……」

ローカスト部隊の小隊長を務めている彼女は驚きの声を上げた。

通常はシャーマンに乗っているためか、多少は運用に覚束なさがあることを否定はできない。それでも勝手知ったるアメリカ製の戦車に変わりはなく、まったく初めて乗った戦車の操縦にはかなり上手くいっている方だと、つい先程までは自負していた。

しかし、今はどうだ。三両対一両という圧倒的有利な立場でいながらも、大洗のナウエルに翻弄されてばかりだ。

一回戦では見かけなかった戦車であったことから、急造チームかと高を括っていたことに彼女は大きく後悔していた。

間違いない。ナウエルに乗っている生徒は戦車道に精通している人物達である。それも、相当高い技術を有している。

急停車や急旋回を容易にこなしてしまう操縦手。明らかに早い装填速度。正確に転輪や砲塔を撃ち抜く砲手。そして西住みほと同じく、常人には思いつかないような動きを指示し続ける車長。

「このままだと負ける……!」

絶望の一言を彼女は口にする。

「急停車!」

一瞬目を離れた隙に姿をくらましたナウエルが突然現れ、砲撃をする。彼女の指示を聞き、間一髪のところでもナウエルの砲撃を躲す。しかし……

「そんな!」

砲弾は後続のローカストに命中すると白旗を上げていた。鬱蒼うつそうと生い茂る密林の影響で、逆にローカストの連携が取れなくなっていた。

隊長のケイから指示された内容は、何としても大洗本隊の場所を見つけ出すか大洗の斥候を引き付け、撃破する。

撃破することはかなわなかったが、引き付ける役目は十分果たしたはずだ。今頃、別動隊が大洗本隊を強襲し、その間にサンダースの本隊が丘陵地帯を確保する算段なのである。

ならばここでむぎむぎ撃破されることはない。一度退き、別動隊と合流することさえできれば、まだこの戦場に残留することができる。

「煙幕を焚いて! 戦線離脱!」

車体後部から勢いよく白煙が噴き出す。こちらの視界も悪くなるが、追手の視界を防

ぐ方が最優先事項だ。

ローカストは小柄な車体を活かし、木々の間を縫うように走り抜けていく。

まだ先は長いが、ここまで来れば安心だろう。

「車長!!」

操縦手が悲鳴を上げる。

その声で彼女は前方を見る。そこにはありえないはずのシルエットが木々の間から、わずかに見えていた。

「どうして!」

「あれです! 車長!」

装填手が指差した先にあるのは、木々の間が5mも無い、戦車が通ることはほぼ不可能と思われたポイントだった。確かに、先回りするにはそこを通るしかない。

だがしかし、あんな場所を抜けることは可能なのか? そんな技術を持った者が大洗にいたというのか?

「化け物がいる……」

○○○○

「絵音は予測してたの?」

「何をですか?」

「ほら、この道を通る事」

「ああ……」

絵音は白旗を上げるローカストを一瞥いちべつすると、一つ深く呼吸をする。

絵音から奇妙な指示を受けたのは、試合の前日だった。

戦車が明らかに通ることができないような場所を知りたい。そして、そこにあるであろう木々の位置を知りたい。

熊野はその指示に僅かながら疑問を持ちながらも、正確に調べ上げ絵音に伝えていた。

「そういうこともあるかもしれないと思ひまして」

「まったく……すごいねえ……」

だとすると、絵音は熊野からもらった地図を見ただけで一寸の狂いもなく生えている木の場所はおろか、幹の太さまで暗記し、不可能と思われる地点の抜け道を見つけ出したというのか？

これだからこの戦車バカは。ありえないことを可能にしてしまう。相手の意表をついたためなら、どんな手間も惜しまない。これほど敵に回すと厄介な存在がいるだろうか。

「それよりも、西住隊長達は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫に決まつてるでい！　こんなところで負けてるようじゃ、優勝なんて夢のまた夢になってしまふからな」

「ああ……私達ですら、この状況を抜け出せたのだ。彼女なら、もつと堅実な方法で打開策を講じているだろう」

「なんだか、由多さんの言い方には棘がありますね。まるで、私が無鉄砲というか無茶というか、ともかくそんないいかたじやないですか？」

「そう思つてないのかな？」

「どんな指示でもそれを成功させてくれる仲間がいると信じているから、私も色々な提案ができるんですよ」

突然飛び出した殺し文句に、絵音以外の全員が顔を真つ赤にする。

それぞれ抱える過去は違えど似たような事情で集まった彼女達にとつて、そのような言葉は聞き慣れないあまり、どう対応していいかわからなかった。

無意識の人たらし。歴史上の偉人にもそういう種類の人が大勢いるようだが、普段はぶつきらぼうでいて本人はまったく意識しないで殺し文句を言うなど、これほどまでに有罪ギルティなことがあるだろうか？

絵音は不思議に首を傾げたまま、まだ何か言葉にしている。

「なんだか皆さん、顔が赤いですが……では、大洗本隊に向かいますようか」

迎撃なのです!

「敵シャーマン部隊発見しました!」

「数は?」

「3台でありますな」

「今の私達じゃ、正面から抗戦するのは難しい。服部さんのおかげで、今は偽装ができて
いるけど……」

「では、このままやり過ぎ(ぎ)しますか?」

「ううん、それじゃだめ。ここで見過(みすご)してたら、丘を取られちゃう」

「ではいったい……」

みほは眼をつむりイメージをする。

ここで絵音を呼び寄せたとしても、ローカストとの激戦を繰り広げていた彼女にこれ以上の負担はかけたくない。万が一にも撃破されている可能性もある。

幸いにもIV号の砲塔が換装されたおかげで、シャーマンの装甲ならば撃ち抜くことができる。それを言うならば、八九式以外ならば、ある程度距離を詰めることさえできれば可能だろう。ならばここはどうするか……

「アヒルさんチーム。少し無茶なお願ひできますか？」

『なんだい、西住隊長』

「このままでは、私達はこの場所で張り付けにされて動けなくなってしまう。なので……陽動を頼めませんか」

『……任せて！ 根性で乗り切ってみせるさ！』

「ここは賭けるしかない。

もともと、最善策で戦えるなど無理な話なのだ。それなら、個々が持っている力を最大限に活かしていくしか活路は見いだせない。

練習や練習試合、一回戦を通して最も被弾率の低いアヒルさんチームならば、必ず陽動を成功させてくれるはず。

それがみほの導き出した答えだった。

「アヒルさんチーム以外は、敵シャーマン部隊の後部が見え次第砲撃をします。では、みなさん。健闘を祈ります。Panzer vor」
パンツァーフォー

○○○○

「ふふふ、お馬鹿な子たち。全車停止！ 砲塔左向け！ 一斉射！」

前方に展開しているシャーマン部隊へと指示をする。

砲塔が火を噴いたとたん、蜘蛛の子を散らしたかのように大洗女子学園の戦車が逃げ

ていく様子を見るのは、最高だった。

本来ならば、既に事前に決めていたポイントで偽装を行い、試合終了までの司令塔を引き受けているはずだったが、ローカスト部隊との連絡が途絶えたことにより作戦を変更していた。

まさかであるが、全滅はないだろう。というのが現状のサンダース側の考えだ。

車両慣れしているとは言いがたいが、それでもエース級の生徒が乗車しているのだ。数百人という膨大な数の中からの精鋭だ。弱いわけがない。

『すごいわね、アリサ。よくわかったわね』

「私の観察眼と推察力なら、これくらい導き出せますよー！」

「ふーん、そう。これからも指示、頼むわね」

『任せてください！』

意気揚々としているアリサが冷たい視線を向ける同乗者に気づくことはない。

砲手にいたっては、ため息をつき軽蔑の視線を向けていた。そのため息から「またか」という言葉が漏れているようだ。

しかし、どれだけアリサに冷たい視線を向けようとも決して同乗を拒否することはない、オフとなれば一緒につるんでいる様子から、彼女らとて本当にはアリサを嫌っていないのだろう。これはアリサのリーダーシップゆえなのか、それとも同乗者の心の広さ

なのかは謎である。

当の本人は無線機を入れ替え、ダイヤルを合わせていた。

見る人が見ればすぐにわかるだろう。その無線機が、いわゆる傍受をするために用いられていることを。

会場の空に打ち上げられた傍受機から得られる相手無線によつて、アリサは大洗女子学園が次にとる行動を全て把握していた。観察眼？ 推察力？ もちろん嘘である。

「私の中で踊りなさい！ クルクルと哀れにねえー」

高笑いをするアリサは悪の親玉と言われれば、全員が納得するだろう。

大洗女子学園の危機はまだ、始まったばかりである。

危機的状況です！

「まだ、敵の姿は見えませんね…」

「どこかに隠れてしまったのでしょうか？」

「でもでも、私達だつてうまく隠れることができてるはずだよ！ 絵音ちゃんのおかげで、どこからかサンダースが攻めてくることはわかっているんだから！」

「それもそうですね…生徒会のみなさんも偵察に出ていますし、もしかして、目の前にサンダースの隊列が通るなんてこともありえるかもしれないですね」

3人の会話を聞きながら、みほはキューポラを開き外へ顔を出す。

小さいシャーマンことローカストは絵音がどうにかいなしてくれただろう。だが、小型戦車はおそらく威力偵察部隊に間違いが無い。鬱蒼と生い茂る木々の中を高速で移動できることができる小型戦車をサンダースは、今回の試合だけに投入したのだろう。

しかし、フラッグ戦である以上狙うはサンダース大学付属のフラッグ車であるシャーマンだ。第二次世界大戦では、アメリカの主力であり大戦終了後も多くの国で改良が加えられ愛され続けてきた猛者を相手取るには、練度も装備もあまりにも劣りすぎている。

Ⅲ号突撃戦車、もしくはⅣ号戦車でウィークポイントを撃ちぬくしかフラッグを行動不能にすることは不可能だろう。

加えて、練度の条件から考えると奇襲作戦などの現場での柔軟な対応が求められる作戦を行うにはリスクが高すぎる。

練習試合しかしていない各車の車長に完璧な行動を求めるのは酷な話だ。

「やっぱり、私達が捉えるしかない……」

まだまだ荒削りな部分が多いが、最も練度が高いのは私達だ。ライオンさんチームには、そのために露払いを頼むしかない。

熱帯地方特有のネットリとした暑さに、みほは思わず小さく唸った。

試合時間が長引くのは良くない。だけど、今、目の前にいるシャーマン部隊以外のサウダースがどこにいるのかわからない。丘をすぐに取りに行くことは出来るが、おそらくお互いにやろうとしていることは同じだ。万が一、鉢合わせなどしたら数十秒と持たずに全滅するのは必須だろう。

「沙織さん、みんなに連絡を取ってください。このままここにいても仕方ありません。一度、ライオンさんチームと合流します」

「わかった!」

「華さん。いつでも撃てるよう準備してください。優花里さんはこのあたりで、一番安

全そんなルートを冷泉さんと一緒に探してください」

「わかりました」

「了解であります!」

「わかった」

とにかく、まずは戦力を整えないと……みほがそう考えた瞬間だった。遙か先から轟音が耳に届く。危ないと声を出そうとした瞬間には、爆発音と爆炎が上がり、M3リーが勢いよく白旗を挙げていた。

『大洗女子学園、M3リー中戦車撃破!』

一瞬の静寂が走る。冷や汗にも似たものがゆっくりと額が流れ出した。

『敵か?!』

『攻撃を受けたぞ!』

『ふえええん……ごめんなさい!』

次の瞬間、通信機から各車からの阿鼻叫喚が聞こえてきた。

「全車前進! この場にいたら危険です!」

みほの対応は早かった。仲間を冷静にさせることも大切だが、狙撃されているのならば、まずは逃げなくてはいけない。どこか遠くへ。誰にも見られない場所へ。

砲撃音は続き、段々と大洗チームへと着弾点が近づいてきていた。

「この先にある大きな岩へ向かってください！ 岩を背にすれば、狙撃されることはないはずです！」

試合会場には似使わない大きな岩があった。あまりにも目立ちすぎていたので、利用することはないと思っていたが、まさか盾にする時がくるとは思わなかった。

マズルラツシユから予測するに、撃つてきているのはM4シャーマンのはずだ。フアイアフライの姿を未だに確認できないのは不安要素だが、贅沢は言つてられない。

麻子の操作技術を真似するように大洗チームが続いていく。

数分後には、なんとか目標地点へと到着することが出来ていた。

被害は初撃で撃ちぬかれたM3リーのみだった。戦力の低下は痛手だが、あれ以上の被害が出なかったことに、今は素直に喜ぶことにしよう。

「ここまで来ればなんとか……」

『西住隊長！ アヒルチーム、戻りました』

「よかった…陽動を頼んだ瞬間の出来事だったので……無茶に無茶を重ねてすみません……」

『大丈夫ですよ！ 根性で乗り切ってみせますからね！』

「ははは……」

相変わらずだな……と思いながらも、アヒルチーム隊長の典子の言葉に、みほはホッと

した。どんな窮地でも、常に変わらない心を持つ仲間がいることは心強い限りだ。
そう安堵した。

再びの砲撃音が響く。岩に着弾するとパラパラと細かい破片が頭上から降り注いだ。

「もう、攻撃を?!」

みほが目を剥く。大洗の窮地は始まったばかりだ。